
ひとかみほん 異世界移転系魔導譚

suparagu8

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひとかみほん 異世界移転系魔導譚

【Nコード】

N0561BA

【作者名】

suparagug8

【あらすじ】

魔導が存在する地球。そこに存在した魔導士が死に、異世界に若返って送られることとなる。そこで政治や闘争、依頼をこなしていくことになる長編……のはず。

一人称の練習と、最強物の練習も兼ねています。最強物らしい最強物を書いたことがないのでその練習をと。後、厨二要素もあるので注意してください。

プロローグ

悔やんでも悔やみきれないことは多い。
ならそもそも悔やまなければいい。

1

目が醒めたら異世界だった。

いや異世界のようなだった、多分異世界であろう。

意識の醒める直前のことを思い出す。

……

……

空白。

何もない。

その瞬間、己が恐ろしく空虚な存在のように感じられた。

ここはどこだ、ここはどこだ。

空を見上げれば、日本と同じような月。

冷たい玉兔。

厳かな月の神。白い無慈悲な女王。

己の手を見る。ある。

足を見る。ある。

肩もある。目もある。耳もある。舌もある。

何もかもは変わらずあり、しかしなぜか俺は、

そう何故か、ここが異世界だと直感している。

月は変わらないのに、此処には妹も、愛すべき友人も、姉も、両親も居ないことが確かだ。

記憶はないのにそれは確かなのだ。

見渡せど見渡せど満天の星空、深い蒼の天空にはこちらを舐めるよ

うに顕在している月。

女王のように厳かな空。寒い。風が、風が寒い。

認識に齟齬はない、五感も、五識も健在だ。

己の生命しんぞうの鼓動は確かにある。

しかしおかしい、ここはどこだ。
森は深い。闇が深い。

俺の名前は、四木義堯よつきよしたか

孤島の名門。四木家の嫡男。

齡は幾つだったか、定かではない。

家族は居る。いや居た？ だがここにはいないことは確かだ。

幻想のような心地。

どうみても現実としか思えないこの世界。

しかしやはりここは現実ではないのだ。

うつすらと思い出す。

齡を家族を己を。

しかしわからない。

現実感の喪失が、己自身への認識さえも喪失させたのか。

わからない、

ただやはり、やはりここは現実ではないのだ

俺の心の内の何かがそう叫んでいた。

歩く。

ともかく歩こう。

肉体を使わずに地面が動くことはない。

地動説であれ天動説であれ、それは変わらない。

この世の真理に最も近い論理だ。

歩みがなければ、世界は進まない。

こんなことを考えていると知られたのなら、
また、同志たちに何かを言われるだろうがな。

しかし混乱しているのだ許せ、許せ友よ。

歩いて、この深く、おどろおどろしい原始の森を歩いて進もう。

進もう。

2

泉。

自然の鏡。

白色の光を湛える、地上の月。

森の囲いの中には、泉がある。

泉にあるのは何か？

清麗な泉には、神が住む。

アルテミスが身体を洗うのも湖でのことだ。
いや河だったか？

ともあれ、

ここはどことも知れない森と月の世界。

つまり神の世界なのかもしれない。

歩いて歩いて、幾時も過ぎた。

しかし景色は変わらない。

まるで迷宮のようだ。

それでもこうして泉は現れた。

進めば進めば、なにもかも変わらないということはない。

ダンテが神曲の中で、進むことにより出会い、別れ、喜び、絶望したように。

深い森は、地獄を思わせる。

そして現れたのが、この清浄なる地上の樂園、泉の泉。

水の水。月の月。光の光。

その至高の泉の中心に神が居た。

己の身体を、洗うは神、神秘なる月の具象。

白い肌、なめらかな肌、雪のような白。

瞳に溢れた慈しみは、しかし同時に厳かさを内包する。

俺は思った。

これは神だ、と。

いや、人ならざる何か、であろうか。

「ようこそ、ヨシタカ」

「こんばんは、美しい神」

年齢を人間と比較することが許されるのなら、
およそ年の頃は一〇代の後半という所か、

銀に輝くその神。文字通り神たる顔貌、それに見合った清浄な声。

月と、泉と、森と、神。

そして一本の葦^{おれ}

「ヨツキヨシタカ、貴方は何故ここにいるか分かりますか？」

「分からん」

「貴方は死んだのです」

「ほう」

面白い、と俺は鼻を鳴らした。

一切無表情のまま目の神は、言葉を続ける。

滔々と語り続ける詩人のように。

「ヨツキヨシタカ、貴方は罪を犯しました」

「人を殺したことが」

「それもあります。

貴方は母を犯しましたね」

「ああ」

「妹を、姉を、弟を犯しましたね」

「ああ」

「全ては私の眼の内にありました。貴方は秘されるべき魔導を使つて、多くの人草を殺めましたね？」

「ああ」

「潔いことです」

「魔導とは使うものでしょう？
そして俺は、俺を抑えきれなかった。
だから……だから？」

「貴方は殺されたのです。」

ヨシタ力。惨めな悪として、強者に黜られこの地へと送られました」

そうか、そうだ！

俺は悪人だったようだ。

そうだ、この神の言うとおりだ。

俺は殺された。そして殺した。

いや、殺したから殺されたのか？

分からない。

ただ俺の故郷、地球は科学の発達した社会だった。

それに反逆するように俺は……

「魔導勢力を指揮し、神の名を騙って、世界へと反逆した？」

「そうです、思い出しましたね、ヨシタ力。

罪あるヨシタ力。腐った草。

貴方は我々神の詮議において、魂の永久追放が判断されました」

「抹消ではないのか？」

「貴方を、我々神は評価しています」

わからない。

目前の神秘なる神。

それを俺は殺せるだろう。

しかし、嘘のように、あの狂気と、あの憤激が俺の中から抜け出ている。

それゆえ俺はこの聖なる存在へと触れようとは思わない。

「ヨシタ力、貴方には力がありました。

しかし貴方の環境と貴方の家の因習、

貴方自身の才が、貴方を深淵へ落とし込み、怪物へと変じさせました。

それでも、貴方が一切、軸を変化させなかったことがあります。

それは神への愛。

純粹なる思念。一念。

悟りとも解脱とも、あるいは放下とも離脱とも、
そういつた神秘体験への渴望を貴方はあの狂気。

無数の人間の命を燃やすこととなった地獄の中でも捨てませんでした」

そこを、我々神は高く評価しているのです。

「ほう、そうだったか、いやそうだったかもしれないな。

……しかし、記憶が無い、違う、いやに薄いのだがこれは？」

「魂を洗ったのですよヨシタ力。

人草。貴方の転生は、不可能です。

そして天にも、地獄にも有害と判断されました。

そのため貴方は我々の世界から永久の追放を受けることとなります」

「わかりやすい、そしてそれは俺の好みだ」

「ヨシタ力、貴方は危うい、それでも圧迫もなく、しがらみもない
世界で、

私は貴方が正常に生きることを希望しています」

「神の希望か、重いものだな」

この神は、神だ。

神としか考えられない程に極まって傲慢。

なんともはや

「俺は多くの人間を殺したのだぞ？

そして盗みもした。犯した。

俺の手で、赤子は心臓を爆発させられた。

数多の家屋は燃え落ちて、そこで同性がお互いを犯し殺しあう呪いをばらまいた。

無数の女性が永遠に悪夢の生物に犯され続けるようにもした。

妹の四肢を切断して、それを連れ回しさえした。

そんな俺の許すのか？」

「現世、実態において貴方がいかなる罪を犯そうが、それは私たちには関係ありません。

人間よ、愚かで自惚れた人間よ。

この上なく傲慢で矮小な存在よ、聞きなさい。

神から見れば、貴様らは、一匹の蟻と、一本の土筆つぐしと、一匹の鼠と、等価です。

貴様らの驕りは、なんの意味も持ちません。

ヨシタカ、お前が、殺そうが、犯そうが、それは我々神には一切どうでもよいことなのです」

「……さすが！」

俺は笑う。

目前の神なる者は、薄く笑った。

「貴方の本質的な罪はただ一つ、人の分際でありながら、無数の魂を、神々の持ち物にして、あの偉大なるアッラー、ゴッド、ヤハウエともエホバとも呼ばれた。

かのお方の一部を弄んだことに他なりません。

貴方の魂を浄化したいほどの怒りに我々神は駆られたのも、そのためです。

逆に言えば、それだけです。

そしてその罪も、貴様の一心な神への指向により減じましょう」

「俺が言うようなことでもないのかもしれないが、うん。
不平等ではないか？」

「ハッ！ 神にとつても貴方は記憶に残る存在だったということですよ。

近年の、あるいは20世紀の無数の魔導士の残念を書から引き出すブックマスター！。

ヨツキヨシタカ、貴方は喜びなさい、神の、我々の視界に入り、認識されたことを」

「傲慢だな」

俺は笑った。

月が明るい。

目前、全裸の神は、滔々と語り続けている。

流れる水。河の蠢き、森の鼓動。

それらと同じような速度で、そして俺に語りかけるように。

「傲慢でなく、なにが神でしょうか？」

神は傲慢なものですヨシタカ。さてそろそろ時間が近づいてきましたね」

何か質問でも？

「俺はこれからどこに行くのだ？」

「そうですね、異世界、我々が管轄する世界ではない事なる時空の星、あるいは宇宙でしょうか」

「そこに神はいるのか？」

「います、我々の位階に相当するものが異なるだけなのです。至天におられる無と有の王たる、我らが一なる神は変わらずあります。」

ヨシタカ」

「ならばいい、それで俺は転生するのか？」

「いえ、貴方の存在そのまま、あちらへと送ります。」

あちらの世界で、貴方は第二の生を送り、死後、その世界で審判を受けることとなります」

「追放されるのではないのか？ 俺は」

「魂は二度とこの世界へと回帰することはありません。」

が、察しの通り、罰であるかどうかと問われれば、否定するしかありません」

「罪に罰がない？」

「貴方はやり過ぎたのですよヨシタカ。

今度はやり過ぎないように、彼の地の神々が判断を下せる段階に留まって生きてくださいね」

「違いは？」

「物理法則、社会形態、国、歴史は異なります。
が、地理はかなり似ていますね。

こちらの世界の人類の歴史でいうところの西洋近世、及び中世、古代、そして近代が奇妙に混交した状態で。魔導が世界の主流を担っています」

「法則は？ 同じなのか？」

「魔素^{マナ}詠唱、紋章、刻印、修錬、個々人が理論を追求し、世界へと現す一切のプロセスに相違はありません」

「そうか」

一息つきたい気分だったが、泉が輝き、光を放ち始めたのでそれも無理だった。

俺は、神を見て、頷き、そして、最後に言葉を作った。

「有り難う、ツクヨミ。」

ついでに言えば股間は隠せよ」

「大きなお世話です。」

貴方たちの粗末なモノと比較しないでください。
ともあれ、よい生を」

よい気分だった。

悩みも、しがらみもない世界。

俺の望んだ世界だ。

あの檻のような島。

檻のような俺の部屋。

せめてもの餌。

慰めのつもりらしい、その無数の本。

皮肉めいた笑みを浮かべた己の姉。

この手で殺めた妹と弟。

虚空へと消えた父と母。

俺を覆う狂気も、

俺が失った世界も、
なにもかもが無い。

「新天地か、どうにもな」

罪を負った俺にとって、いくら何でも都合の良すぎる話だろう。

神の寵愛が、敬虔さではなく、過激さに生まれるなどと。

故郷の連中や、教会の連中が知れば、失神を越えて顔を青く染め上げるだろう。

ともあれ、俺は、再び、世界を生きることになった。

今度の目標はただ一つ。

己を狂気に落とさず。

せめて善く生き、そして神への祈りを捧げ続けること。

さあ、生きよう。

初めての冒険

罪は贖うものではない、忘れ去られるのを待つものだ。

1

人間は世界を持つ。

比喩的な意味ではない。

一つは己が認識できるもの全て、己を中心とした主観的な世界。

そしてもう一つは魂の内に存在する世界。

人はその二つの世界の王である。

生まれた瞬間から宿命付けられている王として役目。

前者は経験と知識の蓄積、なによりも思考の醸成により広く、深まる。

後者も大差はない、成長と共に高まり拡がるものだ。

それはしかし核を持ち、より具体的な情景として現れる。

あるモノは、親しみ住み慣れた街を魂に持つようになるかもしれない。

あるいは空想の中で作り出した国家を。

もしくは仮想の己が設計した都市に。

さらにはかつて読み望んだ書の中の架空の世界を。

人は皆、持っている。

魔導とは、塑像だ、彫刻でもあり、絵画でもある。

それは像を造り、絵を描き、己の望みを現す、
正しく言うのなら魂にある理想の、そして己の核たる世界を、
現実に表示そうとする試みである。

彼らは彫刻家であり、画家であり、そして大工である。

彼らは魔導士である。

己の内側の世界を、現実世界に作り出す。

世界に満ちる魔素^{マナ}を素材として、
魔素を石材として、木材として、あるいはアスファルトとして、
もしくは金、銀、銅として、さらにはヒビロカネ、ミスリルとし
て。

魔導士は理想の世界を、現実^{マナ}に彫り起こす、美術家なのだ。

魔素を使い、世界へ表された物質は、現実にはありえない空想的な

異能を持つ。

とはいえその建造物も無軌道に作られる訳ではない。

それは夢のように儚いものでもある。

現実が存在することの本来ありえない物質は、
時を経て魔素へと還っていく。

そしてまた、それは魔導士の精神力により支えられるものである。

架空の物質は、人の住む世界よりも低次の存在であり、その世界は
永く維持されることはない。

かつて地中海世界に存在したとされる。

英雄の巨大石像も、存在したと考えられている巨大な灯台も。

それを造り出した者の死と共に、綺麗に消え去った。

己の夢見る、あるいは望む世界をどれほどの精度、規模で表すこと
ができるのか、

それこそが魔導。

魔素により、世界へと導く法。

神話時代、英雄の時代、人間の時代、神の時代、鉄の時代、科学の
時代

それらを問わず受け継がれ研磨された技術。

それこそが魔導！

さあ、夢を見よう、そして君たちも、今日から魔導士だ、弛まず生

きよ！

ドイツ神秘教団 自称ヤーコプ・
ベーメの弟子、ヴォルフガング

2

光が止んだ。

目を開く。

地の上にちゃんと俺の足はある。

どうやら成功したようだ。

俺の魂はかの故郷が存在する宇宙、そして次元より切り離された。

この世界は既に己の通い慣れた地球ではない。

かつて幻視したと己が信じている神の国でもない。

俺が居た世界と同じように、地球と同じように、地に足を付けて生きる者たちが暮らす世界。

ここで俺は命を長らえた。

あの神。傲慢なツクヨミという男神が言ったように、俺は、俺が何故か、助かり、今度こそ天寿を全うするようになると言われたのだ。

無数の命を殺め、犯した罪に対する報いがこれなのか？

分らない、それでも俺は感謝している。

これにより、俺は再び神の国を目指すことができるのだから。

ともあれ現状を確認しよう。

俺の手を見る。足を見る。鏡がないから顔は確認できない。

既に記憶が遠く遠く昔のことのように感じられているが、俺の悪逆はそう昔のことではない。

神の言った魂の洗浄によるものか？

いけすかない。

それでも感謝しよう。

神とも、大天使とも言えるかの者たち。
神話の住人どもに。

あの記憶は重すぎる。

罪の意識がない訳ではない俺には、
正気の俺には重すぎる。

妹よ、ああ、妹よ。

何故、なぜ？

なぜ……

……

……… 止めよう。

辛い道をわざわざ歩く意味はない。
進むなら楽な道がいい。

まあ、楽な道を選べぬからこそ俺だったのかもしれないが。

ともあれ、一つ分かったこと、あるいは思い出したことがある。

俺の生前の年齢は確か70以上だったはず。

しかし今、俺の肉体は若い。

多分 10代かそこいらの若造にしか見えないだろう。

手に皺はなく、足の筋肉も健康的だ。

神がなにかをしたのか。

もう一度、生を送る上での贈り物か。

わからないが有り難く受け取っておくべきか。

思考が働かない。

空白が多すぎる。

狂気の残滓が思考の網に掛かったままなのだろうか。

ともあれ現状を確認しよう。

夜だ。

辺りは森。

満月だ。そのせいかやけに明るく、世界は白い。

春なのか冷気はそこまででもない。

久方ぶりの若い肉体でよかった。

この冷気は老体には厳しいだろう。

どこかは分からない。

ただやはりここが異世界だと思えるのは、月の大きさだ。

大きい。巨大だ。

俺の記憶が確かならばだが、地球の世界の月よりも2周りは巨大だろう。

植生も全く見覚え無いの樹木ばかり、鳥の鳴き声も不安を煽る。

心は肉体に引きずられる、と言ったのは誰だったか。

ともあれ、不思議なことに、俺は今ワクワクしているようだ。

多くの事件を、あの島を、あの家を、部屋を、家族を忘れることは出来ないだろう。

それでも、この世界で、生きていくことに俺は思いの外、積極的になれそうだった。

とりあえず、歩いてみる。

赤の万年筆は袖にある。

迷宮のミニチュアもしっかりと胸のポケットに。

土を踏み、暗い森へと進む。

神を信じないわけではないが。

この世界の魔素が元の世界と同一であるのかを確かめるつもりで魔導を起動する。

迷宮のミニチュアを握りこみ、唱える。

『書よあれ、汝こそは叡智の一端

己が蔵書の一片よ、命に従い此処へ』

最小の詠唱。

これをトリガーとして、己の心が描き出した本。

予め魂の内の設計図の一端に描き込んであった書物が、引き出され、
目前の魔素が俺の詠唱に従って形を取り始める。

精神にかかる負荷。

軽い鈍痛が頭に走った。

魔導により造り出した物質は、存在するだけで己の精神を圧迫する。

その代価に現れたのは朱色の書物。

金系により彩られた表紙をなでる。

『赤の本 一』

俺の蔵書の一冊だ。

森の中にある開けた位置に立ち、月明かりを背にその表紙を撫でた。

書が開く。

効果は火炎『魔導的な意味での火の出現と操作』。

魔素を使い、現れた書は、その使った分の魔素を内蔵燃料として持っている。

この燃料を使い。

「火よ」

眩き、目前の空間に炎が現れた。

暗かった森が突然現れた赤い光源に照らされる。

火の玉は、森を焦がさぬように、己の目前を浮いている。

「うむ、森林火災には気を付けねばな」

こんな時に、懐中電灯でもあれば楽なのだが、無い者ねだりをして
も意味はない。

進もう。

歩きながら、蔭を避け、時折聞こえる獣のうなり声を聞き逃さぬよ
うに気を付ける。

木の根を避け、魔本の残量が尽きたのなら、再び造り出す。

この世界は魔素が濃厚で有り難い。

科学の発達は、なぜか魔素の減少を促した。

この世界では未だに魔導が健在なのかも知れない。

気を付けなければならないのは、物理法則や常識の違いだ。

地理は地球に似ていると言われても、住む者、住む生物は違ふのだ。法則も違えば、危険も違ふだろう事は簡単に推察できる。ならば、まずなによりも必要なのは、情報だろうか。

ふと、気付く。

俺の燈りではない燈りが見える。

森、木々の生い茂りの間から、ちらちらと覗けるのは、月の光、陰気な森の闇と影、そして民家の明かりだ。

有り難い。

思いの外、集落が近かったことも。

なによりも迷わずその集落の下へと辿りつけたことも。幸いだった。

「ん？」

ふと、足を止める。

悲鳴が聞こえた。

方向は、前方、森を抜け出た先に在るらしい集落からだ。

何物かに襲われている？

中世において、村を収奪する騎士崩れ、あるいは土地を捨てた農民

が後を絶たなかったと聞いたことがある。

「その類か？」

しかし、聞こえてくる音がおかしい。

女の悲鳴。男の怒鳴り声。受け手の声。

しかし襲う側が恐ろしく無音だ。

襲撃者の時の声も聞こえない。

わからぬ、が悩む暇などはない。

未知には直進しろ、がかつての師の教えだ。

この場合もそれで十分。

森を脱けて、斜面へと出る。

襲撃者は何処だ？

規模は？

考えながら見る。

村は燃えていた。

民家が数十。

小さな集落だ。

襲っているのは。

「怪物？」

それは翼を生やした蜥蜴にも似た生物。

ワイバーンとでも言うべきか。

地上を襲っていたのは巨大な恐竜にも似た存在。

幻想生物か？

見れば、数人の男がそれに果敢にも立ち向かっているようだった。
手に槍を持ち、その背後には女性や子供。

恐竜は全長六mほど、余り大きくないが俊敏だ、火を吐いている上に肉体が強靱なようだ。

村の中心には村人の者らしき死骸。
尾で碎かれたか、噛み付かれたか、あるいは空からたたき落とされ
たか、いづれにしても惨たらしい。

ともあれ、肝心の情報源だ。
殺させてはなるまい。

襲っているモノ、あれは何物かが作った魔導生物と考えるべきか。

彼^{ひが}我の距離は数十メートル。

『書よあれ、汝こそは叡智の一端

己が蔵書の一片よ、命に従い此処へ』

『灯される火は叡智の火

潰える火こそ破壊の火

文明は火により起こり

火により潰える』

二重の詠唱。

迷宮のミニチュアを握り込み、手中に新たな書を表す。

『叡智と灯火の書』

誰もこちらへと気付いていない。

「火よ」

なんとなく気分で呟いてみる。

そもそも書を造り出す、魔素を加工する段階における鍵のようなものとしての詠唱だ。

この段階では必要でもないのだが、無音では味気ない。

その呟きに反応したのか、あるいは何かを気付いたのか、プテラノドンもどきがこちらを睨んだ。

しかし

「遅い」

『叡智と灯火の書』に込めた魔素は家一軒は軽く建造できるようなものだ。

道具の位階、小屋の位階、館の位階、城塞の位階、都市の位階、国家の位階、大陸の位階。

館の位階に位置する魔導が、火を起こす。

単純な効果だ。

莫大な量、半径三〇m規模の火が密集し、渦を巻きながら目的のプラノドンもどきへと飛んでいく。

そもそも俺は、戦闘を本分とする魔導士ではないが、しかしそれでもこれぐらいは軽い。

炎の渦は対象に絡み付き、焼き尽くそうとこびり付きながら焼く。火力はそこまでではない。

対象のプラノドンもどきも魔導により造られたのか頑丈だ。

それでも纏わり付いて焼き続ける赤は、段々と、そして確実に目標を焼いている。

怨嗟の声を上げ、こちらを睨み付けながらも、しかし炎に阻まれこちらへと向かっていくことは出来ない哀れな翼竜。

「みじめな」

ものだなああ、とは口にしない。

もう一頭、背に歪な尾を生やした、地竜がこちらへと駆けてきたのだ。

迷宮のミニチュアを握り込む。

自らの魂に刻まれた己の王国を現実世界へと表す。

『我が世界こそ、真の世界。』

叡智の集積、その一室なり』

と俺が言ったと同時に、魔素が物質へと変貌する。
現れたのは部屋。

小屋程度の大きさの小さな一室。

頑丈な石とコンクリートと煉瓦の合わさった四方体が俺の周囲を包み敵性体の突進を受け止める。

『書よあれ、汝こそは叡智の一端』

己が蔵書の一片よ、命に従い此処へ』

ともう一度詠唱。

『朱の本 二【赤竜】』

一室にある部屋に座り、俺は敵の突進がこの急造の司書室を破壊しようとしているのを感じる。

壊れないことを命じた第4区画の確か67番司書室だったか。

座って、近くにあつた机に書を置き、それを開く。

撫で、目を通し、言葉に出す。

『赤竜は、己の鱗から模られた剣によりその心の臓を破壊された。

その剣は、赤竜七つの鱗により朱と黒に輝き、そしてまた心臓から血を吸った。

そして生まれたは真紅の剣、燃えさかる火を持った灼熱の刃』

赤い表紙の、数百ページはあるだろう書が、言葉通りの真紅の剣へと変貌する。

「疾く去れ」

若い頃の己として言うのなら。

「さっさと消えろクズが」

あるいは

「マジ、消えてくんない？」

か。

どちらも俺には合わんな。

ともあれ、真紅の剣を、そのまま司書室。
敵性体である恐竜もどきのいる辺りへと突き出す。

剣は透過し、向こうにいたらしい、恐竜に差し込む感触が手に伝わった。

うめき声、怒りの声。

そしてそのまま真紅の剣が、火へと変貌する。

差し込まれた剣は、注射器のように、地獄の滾り、あるいは灼熱を地竜の体内へと送り込む。

体内を火に焼かれ、浸食される感触に、絶叫するように、

月下、地竜はのたうち、声を上げずに炭屑へと変化していく。

……

……

「終わったか」

俺は、魔素を全て開放し、造り出した物質を消失させる。

いや、護身のため朱の書を手中に置いたまましておく。

そしてこちらを呆然と、そして警戒するように見ている、数人の男。

どこからか返ってきたのか、俺の周囲を囲むように、また数人の男。

彼らの背後には老人や、女性、子供がいた。

……ふむ、こちらの年齢や、そして今見せた異能に驚いている、の
だろうか。

言葉は通じるのだろうか？

わからない、とにかく彼らは遠巻きだ。

関係ないが俺の精神年齢がやはり急激に肉体に合わさったのか急激に瑞々しさを獲得し初めている。

「あ、あんた何者だ？」

問いの声。

驚くべきことに、あるいはご都合的と言えいいのか、俺には彼らの言葉が理解出来た。

響きは英語に似ている。

しかしラテン語のようでも、ギリシャ語のようでもある。ともすれば韓国語、中国語、ベトナム語の響きもある。

語の意味は、活用は、文法は理解出来ない。しかしそれでも、俺はなぜか、彼らの言葉、名辞の裏に潜む意味が理解出来た。

これは……

「通りすがりの魔導士だ」

「魔導？」

言葉は通じた。意味が分からない。だが魔導が通じない？

「あんたの使っていた神の秘蹟のことかい」

と中年の男が言った。

神の秘蹟、秘蹟か。

「そうだ」

と此処は言っておくべきか。
郷には入れば？にとも言うものだ。

「じゃ、じゃあ貴方は騎士さまなので？」

騎士？

この問いは難しい。
秘蹟＝騎士なのか？

「この場で秘蹟を使える者は？」

とりあえず質問には答えない。
質問に質問を返す。

「へ、へえとりあえず皆、道具を生むことくらいはできますが」

「ふむ」

それが平均か。

ということとは、俺の魔導が派手すぎたのか？

特権階級が使うような規模だったということか。

見れば、幾分警戒が途切れたのか、少し輪が近づいていた。
隠れるように俺を見る少女と目が合う。

人の死。

そして己の死を覚悟した者たちの瞳だ。

しかし思わぬ救いの手が来たことに、
呆然としているようだ。

己の村の火災よりも、放つてある屍体よりも、俺がが気になる程に。

まあ、胡散臭いのだ、俺は、

?いローブ、文明を考えれば有り得ないような服飾。

そして10代の少年だか、青年が、

己を救ったかことに驚き、不信を隠さないのも当然のことだ。

「まあ」

言つて、見渡す。

「まずは、亡骸を弔おうではないか、手伝つよ」

【問答】

「魔導士が道具を持つのはなぜかって？

象徴だよ。己の持つ世界と近い現実の物を持つことによって、それを表しやすくするんだよ。

そしてまた、それは彼らが魔導を使うさいの杖であり、ノミである。またコンパスであり、ペンであり、筆でもある。

それによって彼らは現実世界を、空想世界で彫り削るのだよ！」

ロンドンの魔導士 アーサー・ガブリエル

連行 戦闘

1

俺は村長の屋敷に案内されて、一息ついていた。

村人は命を救って、鎮火に手を貸し、弔いに手を貸した俺を一先ずは信頼してくれたようだった。

質素な、しかしこれでも村では一番立派らしい、小さな屋敷。

先ほどの幼女が、俺の隣で、俺の顔をなにをすることもなく見つめている。

将来は美人になるだろう。

「……どうした」

似合わない真似とは分かっている。

それでも俺は、気付いたら声を掛けていた。

子供は苦手だ。

だが嫌いではない。

丁度、村長らしい老人が眼の前に席に座った。

茶らしき何か。

（嗜好品の拡がっている世界ということがうかがえる）

それを有り難く頂く。

「いや、それでも助かりました。騎士様。

最寄りの駅や街から来たとしてもかなりの時間がかかるのが何時ものことなんですがね、

今日は早く来てくださったおかげで、あのままみんなで死んでいくことが無くてよかった」

中々に辛辣に感じるが、農民の飾らない言葉なんてこのようなものだ。

しかし、村長は俺のことを騎士と思っているらしい。

まあ、特段否定するでもなく、そう仕向けたのは俺だが。

しかし、それでは……

「騎士がいつも到着するのは大体どれぐらいでしょうか？」

「だいたい一本の、そうだなこれぐらいの木が燃え尽きるほどの時間だねえ」

だいたい1時間30分くらいか？

誤差もあるだろうが。

緊急の狼煙か何かを使って、助けを呼ぶ。

ここは僻地の村であることが容易く想像できた。

それでは、つまり、長居をすれば、その騎士やらとバッテリーするのではないか

「それよりもこんな若い方が騎士様とはねえ」

若い、か。

貴方よりも歳上なのだがな、村長。

村長は60程だろうか。

生活の疲れが顔の隅々にまで影を作っている。

村の生活は余り良くないのだろうか。

俺の故郷の村、島の農村でも末期にはこのような顔した大人が目立ったように思える。

ああ、しかし何時のことだったか。

見れば、幼女が、さらに近づいて、こっちの瞳を見ている。

この幼女は、

「村長、この子は」

「ああ、養子ですよ騎士様。

例の戦争で息子は全員、お国の為に死にまったんですよ

その後かみさんも逝っちまって、それで村に捨てられてたこの子を拾ったんですよ」

一瞬、穏やかならぬ光が村長に宿った気がした。

余り俺は好かれていないのだろうか？

いやそれよりも、国が好かれていないのか。

いや、それはどうでもいいことだ。

些事は無数。考えなくてもよいことは置いておこう。

「それでは、そろそろ私は」

俺はとりあえずそう言って、立ち上がる。

うむ、余り長居してバツティングしても面倒だ。

いや、それもいいのか？

「そうですか、ありがとうございました」

言って、しかし村長は立ち上がらない。

村長の態度がいよいよ露骨になってきた。

まあ気にすることでもない。お互い様だ。

行こうと思って、立ち上がる。

しかし違和感。

見れば幼女が己のローブの袖を握っていた。

「すまん」

「これサラ、止めなさい」

言われ、幼女が裾を放した瞬間。

背後の扉が開いた。

「ここが村長の邸宅であっているか？」

凜とした声だ。

澄んだ声が、淀んだ空気を切り裂き、こちらまで届いた。

俺は迷宮のミニチュアを握り込み、手中の書を撫でる。
そして振り向く。

「なんだ貴様は？」

白銀の騎士がそこにいた。

上下一式の白い銀の鎧。

所々に真鍮らしき鈍い輝きがアクセントとしてある。

手には鋭く長い槍。

神話の槍を思わせる、波の紋様の2m程の槍。

首元までを覆う銀髪。

整然とした月の美。

間違いなく月の神の眷属だと錯覚するような、

アルテミスを思わせる美貌。

その顔は不愉快といったように歪められている。

物腰には殺気が漲り、俺を睥睨している。

「通りすがりの者だ」

「騎士様の知り合いで？」

その言葉を吐いたのは村長。

この場合は俺に向かって、聞いているのだ。
しかし俺は騎士ではない。

そして目前、銀の、本物の騎士が

「貴様が村長か？」

私はこんな奴は知らぬ」

「騎士さま？」

俺は冷や汗を流す。

モチロンそれは比喩的な物言いだ、しかしそれに近い心情である。

古ぼけた粗末な一室に、

空けられた扉から、冷たい夜の空気が入り込み、

途端、部屋が硬直して感じられた。

「貴様、騎士を騙ったか」

言うと同時に、本物の騎士は、俺を押さえ込んだ。

体術の心得は俺にもあるが、そのような心得など一笑に付すと言いたげに、

俺はねじ伏せられた。

2

俺は馬に乗せられてあぜ道を進んでいる。

手には枷。

俺の背後には堅い鎧の騎士。

鋭い瞳だ。

迷宮のミニチュアと、赤色の万年筆は没収の憂き目にあった。

とはいえ、俺が村を救ったのは確かな話であり、

村長がそれを弁解し、村人が襲ってきた存在を証言してくれたお陰か命は助かった。

騎士を騙ることはこの国では、死罪に匹敵する重罰らしい。

この騎士アレーアは、知らぬはずあるまい？とそう教えてくれた。

苦笑するしかないがな。

俺は簡単な詰問にかけられたが、しかしそれもほどほどに切り上げられた。

理由は分からぬ。

が、推察するのならば、

俺が、「貴族学校」か「軍人学校」から脱けだした何処ぞの貴族の師弟であると勘違いしているらしい。

ともあれ、詳しい正体が分かるまでの間、不審者として拘束することだ。

「俺が大貴族やら有力者の息子だったらどうするのだ」と聞いてみたが、

「それが規則だ」と言い捨て、

「貴様のような学生、それも未だ16を越えなさそうな学生になにを臆する必要がある」と言い切った。

理路整然、正道を歩く者なのだろう。

頭が硬く、そして融通が利かないが、使命と国家への無二の忠誠を持っている。

このようなタイプは、厄介者として疎まれることも多いが、しかしそれ以上に、頼りにされたり、重宝されることも多い。

などと考えていると、周囲の景観が目飛び込んできた。

道は辛うじて踏み固められていると言えるような、ぼこぼことした険しい道。

森と、様々な植物の緑、そして岩、起伏のある道。

険しい大地を進む馬は、尻に振動を直に伝える。

馬に乗り慣れていない者　つまり俺だが　には中々に辛いものがある。

後ろから、俺よりもやや高い位置から吐息。

試しに話しかけてみる。

「なあ」

「……………」

反応はない。

「あの村を襲った敵はなんだったのだ？」

「……………」

やはり反応はない、暗い月明かりの下を、馬の歩みの音が響く。

「驚いていないところを見ると最近頻発している、ということところか？」

「貴族のボンボン、それも放浪学生には関係ないな」

言い捨てる。

見れば、この騎士は20代の前半というところか、堅い口調に似つかわしくない美貌。

「俺の名前はヨシタカだ、どうせならそう呼んでくれないか」

「不必要だな」

「俺が思うに、ああいった幻想生物を造り出して、何かを企んでいる輩がいるのではないか？」

目を白黒させて、騎士がこちら睨む。

「何か知っているのか？」

「単なる推測だ騎士アレーア」

眼光が鋭くなる。

「アレーア・ファン・P・エルデルだ、名前で呼ぶな」

なるほど、言われた通りだ。

初対面の相手の名前を呼ぶというのは普通は失礼なことだ。

うむ、そうだ、そうだった。

長い狂気が、己の常識を奪ったのか？

我が師、【銀河の騎士】シュテファンはそういう所に厳しい方だった。

懐かしい。

何もかも懐かしい。

久方ぶりに、人と会話をする。

先ほどの村長もそうだ。

会話自体が懐かしいと考えるのは俺の晩年が狂乱に満ちていたからだろう。

いや、言い訳じみて聞こえるか。やめよう。

「俺は何処に連れて行かれるのだ？」

「近郊、エーデンの軍団駐屯地だ。」

そこの刑門で取り調べを受けることとなる」

「騎士エルデルは付いていかないのか？」

「……そうだ」

何かを言いたげに、曖昧に言葉を濁す。

エルデル卿のその対応の意味が今イチわからない。

？だがまあ、関係のないことだろう。

少しだが俺の意識も覚醒してきたようだ。

そしてやはり思うのは、このままでは不味いということだ。

このまま取り調べられたならば、俺は不審者。
当然、騎士でもなく、貴族でもない。

そもそも元々この世界の住人ではないのだ。

紛う事なき不法入国者が俺だ。

やはり、どこかで手を打たなければ。

……

……

春の夜風、心地よい。

春の夜の満月、美しい。

馬の振動、痛い。

背後の陰呑ではない空気、刺々しい。

見れば、森は途切れ、辺りは草むら、所々木々、そして畑が見える。
一面は斜面。

視界は開ける。

日本ではありえない雄大な景色。

モンゴルに似ているか。

懐かしい。

直接訪れたこともあるが、

なぜか思い出したのは、子供の頃、テレビのドキュメンタリーで見たその風景だ。

「ふむ、騎士アレーア」

「なんだ」

3

とそこで違和感を感じる。

「……見られているな」

驚いたような気配が後ろのアレーアから感じられる。

「不埒者か、貴様の仲間か？」

俺を疑っているようだった。

「いや、それだけはない」

と言っても信用はされまい。

案の上、疑いの眼差しを後頭部に感じる。

瞬間、騎士は馬から飛び降り、一歩で数メートルを跳躍した。

俺も馬から転げ落ちるように着地し、躲すことに専念した。

大地を抉る音。

土と音が等しく削られ、月より生まれた影が波立つのが視界の隅で見えた。

同時、馬の潰れる音。

血の赤が、周囲に撒き散らされた。

轟音。

視界には巨大な何かの影。

ガアアアアアアアアアア

叫ぶ声。

その全高は6 m近くにもなるだろうか、巨大な類人猿。しかし顎が、通常では考えられないほどに大きく。

またその口から緑の粘液が垂れている。

キューイ

奇妙な鳴き声、見ると先ほど倒した者と同じようなプテラノドンもどきが空を泳いでいた。

騎士の反応は早かった。

「槍よ、槍よ、銀の槍よ！」

その後、何かを呟いているのが、聞こえるが、詳しくは聞き取れない。

ぼけた詠唱が聞こえる。

周囲一面の地面が青い雪色に染まり、そこから巨大な杭が二本、猿を狙って生まれた。

ふむ、小屋の位階の魔導か。

俺を巻き込みかねないその魔導をしかし、類人猿は驚くべき跳躍力で避ける。

俺は、目を瞑り、世界を削るべく尽力するが、道具がない。

見れば、近く、あの騎士が落としたらしき、俺の迷宮のミニチュア大理石を精密に削ったそれが落ちていた。

俺は芋虫のようににじり寄る。

遠く、視界の隅。

白銀の騎士は、背に負った2m程の槍を構え、猿と格闘しているのが見える。

地の杭と、銀の槍の二段構えだ。

何かを唱え、時折、攻撃を躲し、あるいは何かを飛ばし、相手を牽制している。

あのままでも、倒すことはできるだろう。

しかしそれは敵が一匹だけであればだ。

空中、プテラノドンが迫る。

しかしアレーアはそれを見ないで躲した。
横転。

まるで後背に目が付いているかのように。
回り、避け、跳ぶ。

鮮やかな、しかし確実に劣勢を示すその状況が、視界の隅でうかがえた。

とその時、俺はようやく迷宮のミニチュアに頬で触ることが出来た。
師の言葉を思い出す。

「魔導の精度は、どれだけ己の世界の物質が、精密に、過不足なく再現されているかで。

魔導の規模は、どれほどの範囲、どれほどの量、どれほどの大きさで、どれだけの質で、それを表すことが出来るかだ。

魔導士は芸術家だ。

表現者たる彼らは道具を持って、世界の魔素を質量として、仮想の物質を現実の物とするのだ」

いつになく鮮明な思い出を胸に浮上させ、どうするかを考える。

体勢が悪い、少々時間が掛かるが、敵の目当てはなぜか騎士アレーアらしい。

大技で行くか？

ともあれ俺は詠唱する。

『あかあかや、あかあかあかや、あかあかや、あかあかあかや、あ

かあかやつき』

明恵上人の詠んだ歌だ。響きが良いので詠唱に使っている。

俺の故郷を思い出す。

俺の育った国、日本を思い出す。

古い僧侶の詠んだ短歌を謳い、思い浮かべるのは真紅に染まった月。

「我が迷宮、我が図書館、我が叡智の神殿には、五つの窓。

我が国は、迷宮。我が国は、書の殿堂。

遙か西方、見える伽藍に窓はあり。

伽藍の天に窓はあり、窓の外には朱い月。

闇夜を雲を、睨んで笑うは朱い月なり」

言い終わった瞬間に、世界の魔素に、俺は己の魂を刻んだ。

魔素を、俺の理想の王国の一部へと変貌させる。

「なんだ、これは!？」

アレーアの声。

それもしようがないことだろう、それほどの急激な変化。

天には緋い月。

真紅の月。

禍々しい赤い月が現れた。

俺の魂の王国において数少ない、現実に影響を及ぼすことの出来る、魔導。

『偽月・緋』

恐ろしく近くに、クレーターまで視認出来る程の満月。

異世界、俺の望んだ世界の月の一つが現れる。

城塞の位階の魔導。

長い詠唱の間、よくアレーアが防いだ。

かの者はおそらく、館の位階か、よくて城塞それも小さな砦のそれだろう。

魔導士は魔導を唱えねばただの人。

詠唱と想像は、

行使の回数と何よりもどれほど己の理想の王国の設計図が書き終わっているかにある、
と言っても過言ではない。

「よくぞ立ち回ったな騎士エルデル」

俺は膝立ちだ。

プテラノドンの目標はアレーアで、類人猿も同じだった。

なぜ俺を横に置いたのだ？ 俺の戦いを見ていなかったのか？

先ほどの戦いを起こした人物とは別なのだろう。

そうでなければ余りにも稚拙。

つまり敵は複数で、目標は騎士なのだろうか。

脳裏の片隅でそういった場違いな思考を行いつつ。

俺は笑った。

狂気にも似た笑み。

しかし心地よい。

清々しいのだ。

「ほれ、月が降るぞ？」

俺の言葉に反応したのか、

真紅の月が照らしだし、草原は赤一面に変貌し、

その光を浴びて、威嚇するように飛び回り、狂乱に陥る二匹。

狂乱の月は、その効果の下にある敵性体を狂気に突き落とし、

そして、脳を刻一刻と焼く効果を持つ。

「まあ対象は選べるのだがな」

苦悶に歪む幻想の生物。

いよいよプテラノドンが地に墜ちる。

類人猿も笑いだし、そして涙を流して地に伏せた。

「そしてまた幻想の生物相手には、その存在を摩耗させる」

その事態を尻目に俺は

目前に赤の書を出現させ、

それを舌で舐める。

地に芋虫のように侍り、表紙を舌で舐めて
そして俺を束縛している枷を燃やす。

「ふむ、まあこんなものか」

そして真紅の月は消え去った。

交渉 出発

「大陸に匹敵し

王国を作り上げ

都市を制御し

城塞を構え

館を持ち

小屋に住み

道具を操る」

導師 矢本吉太郎

「第一の秘蹟は、大陸を造り出しましょう。

第二の秘蹟は、並ぶモノ無き異形の王国を現しましょう

第三の秘蹟は、貴方の夢見た都市が立ち並びましょう

第四の秘蹟は、城を建造し、一つの広大な範囲が貴方のモノになり
ましょう

第五の秘蹟は、館あるいは一つの家に困ることがなくなりました
第六の秘蹟は、快適な一室、様々な道具を収めた小屋や倉庫を呼び
出せましょう

第七の秘蹟は、便利なことに、貴方の欲する道具がいつでも手元に
貸し出されるでしょう。

姫、以上のことから私たちが常に何もかもを吸収し、
そして自らの王国を一つ二つこと積み上げていくことが、どれだけ
大切なかが分かるでしょう。

石瓦の一片から、住民まで、その貴方の世界を、世界に造り出すこ
とが秘蹟です。

強く、高い精神をお持ちくださいませ、姫」

王国暦555年 宮廷秘蹟士バルザックが第7姫アーバルシュ
タトに告げたとされる言葉。

地に伏せていた獣たちは消え去った。

そして目前には槍を構えた騎士アレーアと、

赤の書を構えた俺。

右手には迷宮のミニチュア。

「貴様、何者だ」

当然のように警戒している。銀騎士。

俺は真顔だ。

ここからが正念場であるのだから。

「言っただろう？ 通りすがりだと」

うむ、気障な物言いになってしまった。

案の上、目前の騎士の頭部に青筋、思った通り、こういった物言いは好まない性質らしい。

「今の術、第四秘蹟」

睨み、言う。美しいが射殺すような目をしている。

不審者、いや敵を見るような瞳。

「第四秘蹟とここでは言うのか？」

「そんなことはどうでよい、
貴様、何処の手の者だ？」

俺は喉で軽く笑った。

眼の前の騎士の氣勢が可愛らしく思えたからだ。

「騎士エルデルは、第五の秘蹟、もしくは第四秘蹟に掛かるかどうかというところか？
推測だが」

「質問に答える」

声音は変わらず、目元も鋭い。

それでも些細な反応から、彼女が凶星を突かれたことが把握できた。

「異世界の者、と言って信じるか？」

試しに会話のジャブ。

傍から見て、異様な光景だな、これは。

多分俺は、騎士の言動から、そして自分自身の推測から
14〜5歳の少年に見えるのだろう。
それが一回りも歳が違って見える、精悍な女騎士を圧迫しているの
だから。

「戯言を」

騎士は吐き捨てた。

「戯言でもあるまい」

何を言うつもりか、と睨みを強めるアレーア。

「俺は本当に異世界の存在だ。

あるいはそれが信じられないのなら、遙か他国の存在と考えよ。

そしてまた、俺が年相応であると考えるのも止めてみたらどうだ？」

「……信用できんな」

騎士は睨み続けている。目が痛くならないのだろうか。
しかし鋭い眼光、そして冷たい研ぎ澄まされた殺気だ。

「考えてもみる、第四秘蹟を使える無名の存在が国にどれほどいる？」

これは半ば賭であつた。

館の位階（第五秘蹟）を越えるかどうかというこの騎士アレーア・エルデルの自負。

そして俺が城塞の位階（第四秘蹟）の魔導をあゝの精度で使ったことへの驚き。

そこからの推測として、この世界でも、城塞にまで至る者が少ないのならば、

「……む」

騎士は眉尻を少し緩めた。

草原に吹く風に、髪を煽られている騎士は警戒をほんの少し緩めたのだ。

「どうだ？」

「……秘匿されていた無名の秘蹟士かもしれない。
あるいは雇われた暗殺者かもしれぬ。
世界は広いのだ」

「そう、世界は広い。

だが、考えても見よ、私は先の村でも怪物を屠り、
そして今もまた、怪物を屠った。そして騎士殿を助けたではないか。
私が敵対する存在であれば、どうだ？ そんなことをしたか？」

騎士は鼻で笑う。

槍を構え、力を込めている。

「それこそ、演技である可能性も捨てきれないだろう。
面妖な餓鬼を信用して、後ろから刺される、操られる。
姫を罠に嵌め、死に至らしめることになりかねない」

「ふむ、最もな話だ」

俺は楽しくなってきた。

口ぶりが、若かりし頃の勢いを取り戻し、

そしてまた、晩年、狂気に墜ちた時の狂熱をも内包する。

「では、どうかね？」

ここで私を殺すかね？ 見逃すかね？」

俺は書に力を込める。

とは言ったが、この距離の一体一の戦闘では分が悪いだろう。本来ならば俺はこの距離では詠唱の隙を突かれることになる。

ただ現在は朱の本が手元にある。

これはタイムラグが殆ど無い、それ故、運試しにもなるが、そう易々と殺されることは無いとみた。

「…………むう」

騎士は唸った。

様々な思惑が、思考が脳裏を巡っているのだろう。

「ふむ、君の主には敵が多いのだろう？」

騎士殿が死んでも元も子もないと思うがね」

嫌みつたらしく言う。

自然このような口調になってしまう。

覚醒してきたのか？ あるいは若さを取り戻したのか。

我ながら嫌な餓鬼だなあ。

ともあれ、先ほど、騎士が口を滑らせた情報を口にする。

己の失言に気付いたのか、騎士はこちらを睨む力を強くした。

「気に食わんな」

「結構、さて俺は異世界人だ」

まだ言うか、コイツ、とても言いたげに、騎士はこちらを睨んでいる。

「とすればこの世界に地盤がない、己の存在に裏付けがない、それは不便だ」

「それがどうした」

「どうだ？ 俺を貴様の雇い主の下に連れて行っ」

槍の突き込みが来た。

一拍の動作で、無駄なく、蛇のように合間を縫って、俺の首元に迫ろうとする のを俺は火で阻んだ。

「くっ」

「俺はこの世界では真っ当に生きたいのだ」

「繰り言を、先ほどからぺちゃくちゃと、餓鬼が」

「騎士殿よりも歳上なのだがなあ、俺は」

騎士は未だにこちらの隙を窺っている瞳だ。

目には怒りと不信、この騎士殿の心は、人を阻む銀と水晶によって出来ているらしい。

「騎士殿の主は敵が多いのだな、そして騎士殿はその尖兵というところか？」

普段からこの辺りに任を持っている騎士という訳ではあるまい」

騎士はなぜそれを？と不信を色濃くした。

「推測だ……騎士殿の任務、これは急なものであったのではないか？」

「……」

「肯定か、先ほど刑門、おそらく番所の類に俺を置いていくと言った。」

つまり、これは本来騎士殿の仕事ではない」

「それが、どうした」

「想像に過ぎないが、頼まれたのではないか？
そして騎士殿は、主の立場を考えてそれを断れない」

相変わらず月は明るい、風も冷たい、
そして雰囲気は暗い。

それでも俺は構わず饒舌だ。

「先程の村の敵、今戦ったものよりも恐ろしいものであったよ」

目を見開く騎士アレーア。

信用できない俺の言葉、それでもそこに真実味を感じたのか。

「騎士殿は嵌められたのではないか？」

騎士殿を殺めるための、騎士殿の主の駒を潰すための策に」

主の命。

急な頼み。

恐ろしい敵。

幼女の態度。

襲ってきた敵、しかし騎士のみを狙う。

名前を呼んだときの不審な態度。

何もかも疑うような騎士の姿勢。

そして姫には敵がいる。

「主の命と言ったがこれは本当に主の命だったのかね？」

瞬間。

騎士の脳裏に稲妻が走ったかのように、目を見開き、驚いた。

「……まさか、いや、ハフカーズ伯爵かつ！？」

と驚きを言葉にした、後に、しかし気を取り戻したのか、首を振り、

また俺を睨んだ。

「しかし貴様は信用できぬ」

「そのようなことを言っている場合か？」

「ふん、貴様も言っていたであろう、姫には敵が多いのだ。

貴様が手の者でもおかしくはない、そしてこの策略自体の構成員ではないと誰が言える？」

キリがない、決定的な交渉の材料がない。

楽しい、しかし不毛だ。

そして材料はないわけではない。

一つある。

「少し待て」

言って俺は、赤の書を地面に叩き付け、その魔素を全て火へと転換した。

およそ二〇秒の燃えさかる豪炎の壁。

『赤の本 一』

そして俺は唱え、謳った。

燃える草原、地面の中で。

驚きこちらを睨み警戒している騎士アレーア。

それらを笑って、見て、そして詠んだ。

……

……

……

そして騎士は頭を垂れて、俺を認めざるを得なかった。

俺は頷いて、そして二人で進むこととなった。

あれから歩き通した。

騎士アレーアに従って、俺は道を歩いていた。

「『工匠』」

アレーアが無然とした顔で、しかし畏怖を込めて俺をそう呼んだ。

彼女は認めたのだ、俺を。

そして彼女は選択した。

俺を取りこむ方が早いと。

「単純な暴力が大きな者は、小賢しいことを企まない」とまでは言わないが、

それでも直裁を好む。

彼女はそれを知っていた。

そして、俺もこの世界についての知識、俺の足場が欲しかった。

その結果がこれだ。

「ヨシタ力でいいのだぞ？ 騎士エルデル」

「ふざけたことを言うな」

変わらず冷たい目でこちらを睨むのは、やや前を歩く騎士アレーア。

「態度が変わらないのはよし。
事実この至近距離ではお前の方が圧倒的に有利だ。
実際、俺はお前に近接されたなら、呆気なく死ぬぞ？」

沢山だと言うように大きく嘆息し、
騎士エルデルは、無表情を作る。

「ふむ、ともあれ信用したか、あるいは俺を利用する腹つもりか」

「そういうことを自分で言うな餓……ヨシタカ」

などと話をしていた最中。

「お？ アレか？」

城塞が見えた。

その周囲には都市。

「そうだ、城塞都市エーデン。
このクトリノス王国の東の要。第六軍と第二軍が駐留している国防
の要所」

「ふむ、中華風の城塞都市？
いや西洋の都市か」

解説に、知らず知らずそう返していた。

案の上、アーレアは

「チュウカ、セイヨウ？」

と首を傾げた。俺はなんでもないと首を振る。

意味のない発言は独り言と大差がない。

自重すべきだろう。

「ふむ、入ろうか」

「貴様に言われなくとも分かっている」

やはり俺の見た目がやりづらいのか、無意識に年下に見ているのか。

アレーアはなんとなく偉そうと言うか、上から目線だ。

というよりも多分、俺の力に対しては信用しているのだが、

異世界だとか、年齢だとかに関しては、半信半疑のままなのだろう。

門衛になにか紋章を見せて、アレーアそして俺ことヨツキヨシタカは城塞に入る。

「人口は？」

「詳細は国家機密だが、まあ大体一〇万前後というところか」

「ほお、かなりでかいな」

言って、俺は街を見渡す。

夜半だ。明かりはなく。

人の声も疎ら、まれに酒場から聞こえてくる程度。

要所要所には夜警が立っている。

想像以上に近代的な制度により、都市や国家が運営されていることが見て取れた。

「で、目的地は何処だ？」

「あれだ」

言って、白銀の目立つ鎧を着たままの、槍を背負った銀髪の騎士は、丘の城塞の麓にある。

無骨な四角形の茶色い建物を指差した。

「行くか」

「言われなくとも」

「衛士ノーデンホースはどこだっ!？」

怒鳴り込むというべき形容で、彼女は衛士、あるいは下級騎士の詰め所に怒鳴り込んだ。

単体でそれなりの武力を持った秘蹟使いは、こうした治安維持や、様々な存在の退治、問題解決に使われるらしい。

格好は揃いも揃って、色の濃い布を使った制服。

ふと自分の服を見る。

ローブはいいが、その下、シャツやらベストやらズボンやら、どれも材質からデザインまで怪しさ一杯だ。

ふむ道理で!この都市に入ってから奇異の目で見られていたのだな。

思えば、村人や騎士殿も同じような目で……

とそこで怒鳴り声。

「居ないっ!？ 居ないはずがないだろうっ!？
何処に消えたっ! 隠し事をするとならんなぞ!！」

興奮しすぎだな、騎士殿は。

クールとも見えるが、実のところとも直情径行なのだろうか。
思えばそれらしい所はあった。

いきなり攻撃、恫喝。うむ！

だが、それでいて、冷静なところもあり、疑い深い。忠誠心も高い。人間らしい複雑さだ。

ホントに騎士殿は、部下に欲しくなるような性格である。

「まあ待て騎士殿、件の人物。
失敗の報を聞いて逃げたか、あるいは消されたか、と考えるべきではないか？」

「っ……ちっ」

舌打ちをして、頭を振った騎士。

俺は溜息を吐く、さてこれからどうすべきか。

とそこで騎士が俺に手招きした。

乱暴な態度から、どれだけ不満が溜まっているのか、そして危機感に駆られているのかが分かる気がした。

「さっさと行くぞ！」

「？ 何処に？」

「カッセンだ、ヨシタカ！」

凄い剣幕だ。

なんだか俺の思考が大分ほぐれてきたのも相まって、少し怖い。

いつの間にか俺の精神年齢が少し下がっている気がした。

神に意図的に下げられたのか、もしくは俺が無意識的に下げたのか。

そしてまた、騎士アレーアがいつの間にか俺を、名前で呼んでいたことに今気づいた。

「カッセンとやらでいいのか？」

「ああ、カッセンは姫の館がある王都の衛生都市だ、そこに姫がいる」

「心配か？」

決まり切った事を聞くな、と俺を一瞥する騎士殿。

騎士アレーアは、激情をどうにか押さえ込んで戦う人物という所か。

ともあれ、推論を披露し、カードを切って、信用は勝ち得た。

この世界の情報のため、これでよかったのだと思う。
方針は問題ないだろう。

順調にものごとが進んでいる気がして、少し安心した。

そつえばどうでもいいことかもしれないが、

先ほどから騎士殿の背負った槍が、天上や壁に当たっていて、耳と目に煩い。

興奮している本人に言ったら怒られそうだ。

4

そして俺と騎士殿は馬を借り、丘に城塞があり、それを放射状に街と城壁が囲んでいる都市から、速やかに出発したした。

素早い移動だ。好ましい。

疾風のように素早く駆けつけ、そして主に従う。

むかし読んだ騎士の話进行出す。

妹が好きだった。

もう50年以上も前の話だ。

そして俺と騎士は夜が明けるまで、馬で走り来むことになったのだ
った。

蛇足的な話 一応師弟の小話。魔導の設定が分からないよ!という方のため

一応対話形式なのですが設定羅列的になってしまったので、
読んでやってもいいぜ、という方どうぞ。

とりあえず頑張って読みやすい会話の流れを構築しようとしたのですが。

長つたらしい設定はNO!という方、フィーリング型の方は回れ右
でも大丈夫かと

蛇足的な話 一応師弟の小話 魔導の設定が分からないよ!という方のため

「私の中に住む者を、私は大切にしたい」

導師 矢本吉太郎

「神々とは神の意識の機構、制御と管理を委任された存在でもあり、また幻想でもある」

二二世紀のある新しき魔導士の言葉

1

一人の若い、若すぎる女が深く椅子に腰掛けている。

蒼い、通常の世界では有り得ない髪色。

齢は一〇を越えるかどうか、というところか。

そしてまた一人の老いた男がいる。
彼は組織の正姿として蒼いローブに身を包み、椅子に座る女の傍に侍る。

二人の眼差しの先、
年の頃20を越えるかどうかの、見目良い、しかしどこか細く頼りない青年。

彼らは、何事かを熱心に話し合っている。

いや、正しくは話し合っているというよりも、青年が教示を受けているのだろうか。

「では、魔導とは、一体なんなのですか？」

青年が聞いた。

そして老人は嘲るように笑った。

小さな女は無表情を一切動ぜず。

「まさか孤島の名門、あの歪な離宮島、迷宮の一族にそれを聞かれるとはな」

老人にしては若々しい声。

青年はしかし、表情を変えず、真剣な眼差しで老人と女を見ている。

どこかの書斎、赤い絨毯、蝋燭の燈り。

嘆息し、老人は力のこもった眼差しを生み、今度は皮肉気に笑った。

「このような熱意をもった若者を、閉じ込め、そして歪め、あのような弱卒を当主に据えるとは、名家の名が聞いて呆れる」

「ヤモト」

水のように澄んだ声。

波打った水面の響きに従うように、老人は急に声を低く落とした。

「相分かった、ヨシタカと言ったか……貴様に答えよう」

青年は、ヤモトと呼ばれた老人から目を離さない。

「魔導とは何か。」

ふん、まず、前提からだ。

何分難しいが、やってみようか。とはいえ長い話になるだろう。

しかしまあ、話半分でもよい、後でそういうモノを、一から学び行くのが普通なのだからな。

……さて、まず問おう。

世界とは客観的世界と主観的世界の二つが存在すると仮定できる。

これは分かるな？」

青年は頷いた。

「そうだ、人は己の認識するように世界を認識する。

お前を中心とした、お前が存在するゆえに存在する世界を主観的世界と考えよう。

お前を真ん中に置いた、お前が認識できる全てだ。

耳、舌、鼻、手、目、それを使って作られる世界。

……これは個々人によって違う、当然のことだ。

色覚異常の人間の赤と、貴様の赤は違うように、
また同じように、

お前の世界、お前が見る電柱と、他人が見る電柱の印象も、形も、
完全に同じとは限らない」

「哲学の話ですか？ 認識の」

問いに、老人は首を振る。

「そうだ、しかしそれは問題ではなく、またこれは前提だ。

……この個々人の認識により違う、あるいは個々人があるからこそ存在するとも言える世界を、

個々人の見た夢、魂にある世界で塗りつぶす。

個々人の認識する主観世界を、客観世界へと浸食させる」

これが大まかに言った魔導だ。

青年は頷く。しかし不満気だ。

老人は頷き、話を続ける。

「分かっている。

今の説明は説明になっていない、だろう？ 曖昧で、大まかに過ぎるだろう。」

ところで、ヨシタカ、貴様は神を信じるか？」

しばしの間、やがてヨシタカは頷く。

老人は嬉しそうに笑う。

「そうだ、神の實在、あるいは神的な何かの實在は、魔導の基本。疑い得ない真実だ。

しかし、その真の意味を貴様は知るまい」

青年は、不思議そうに、首を傾げた。

少し溜めて、老人は、ローブ姿の老人は、囁くように大声で話を再開した。

「この世界は、神の夢だ」

……

……

「……意味が分からないという顔だな。
文字通りだヨシタ力。

この世界は真実、神の見る夢なのだよ。

あるいは我々が、神と呼ぶ何かの見る夢と言ってもよい。

神とされる一人の人間の夢かも知れない。

遙か上天に住まう一個の生命の魂の中に住んでいるものかもしれない

い。

ともあれ、間違いなく私たちは神の内にいる。

神の魂の内で、神が夢見る存在として生きている。

広大無辺、無限にも近い次元の、あらゆる可能性を持った夢に生きる存在。

……それこそが私たちだ」

ヨシタカ青年は首をますます傾げながらも、

しかし次第にその意味するところが理解出来たのか、

徐々に顔色が明るくなり、そして驚愕が生まれた。

それを、冷たい、一切微動だにしない顔で眺めるのは女。

理解の早い生徒を嬉しそうに眺めるのは矢本老人。

「そう！ 我々は神の中で生きている。

我々は夢の中の存在だ。しかし意志を持っている。

複雑か？

この現実世界が、肉が、匂いが、そして音が、夢のような曖昧なものと思われないか？

だが、この世界は、我々は……夢を元素に生きている夢中の存在なのだ。

……言いたいことが分かってきたようだな。いやそれともますます混乱に包まれたか？

だが続けさせてもらおう。

さて、そうだな、私たちもまた夢を見る。

それは我々の中にも魂はあることを意味している。

それはつまり、我々一人一人も、

また一つの夢の世界の造物主ということではないかね？」

沈黙。

老人のしわがれた息づかいのみが響く。

「私たちが見るこの世界を我々は現実という。

神から見れば夢で、神にとっては己の内にある空想のようなものかもしれない。

だから実のところは、この世界は曖昧で、神の見る多くの夢と交雑するようなものかもしれない。

ただ、一つの事実を思い出せ。

我々も夢を見る。

曖昧で、魔素を含んだ可変性の肉を持った我々は、しかし夢を見る。

魂という閉じた世界を意識に映し出し夢として見る。

そして神の見る夢がこうして生きている、我々のように生きて確かにあるのなら。

……我々の見る夢もまた生きて、そして確かにあるのではないか？

当然、それは私たちの生きるこの現実よりも、より曖昧なものかもしれないがな」

調子に乗ってきたのか、一気呵成に言葉を進める一人の老人。

愉快そうな喜悦。

「私たち・我ら・己、は神の一部であり、その内に住む、故に鮮烈な祈りは、

神というモノに届くし、願えば、神の意識の中に浮上することができる。

この世の全ては神の表れと、凡ては神の現れと、^{すべ}この世は神の見る夢と理解せよ青年。

そして、私たちの見る夢の世界、それを現実に、神の見る夢、つま

りこの現実世界へと表出する。
これこそが魔導だ！」

青年の顔には、理解の色。

そして驚き、恐怖、絶望、希望、それらが混在化した表情。

氷の彫像のように一人の女は動かず。

一人の老人は、ローブを激しくはためかせて興奮に浸る。

「とはいえ無に有を生じることとは、そう生やさしいことではない。

あるいは何かがあるところ、満杯である器に、新たに水を流し入れることは不可能だ。

それが魔導だとするのなら。水は入れ替えねばならない。

魔素と呼ばれるものは、世界に満ちている。あるいは世界を構成している。
マナ

これを己の夢と置き換える。

置換し、現実^に己の世界を造り出す。

まるで彫刻家のように、石を削るようにマナを削り、そして世界は現れる。

そうしてお前の夢見た仮想の世界　魂の世界は造り出されるのだ」

「……魔素とはなんなのですか？
そして……なぜ我々はそれが可能なのですか？」

そもそも、と理解したようで、しかし未だに理解しきれない青年が言った。

「マナとはな、簡単なことだ。

それは曖昧なモノ。もやだ。

貴様も経験にないか？ 夢を見たときに視界の端に掛かっている。

あるいは焦点をおいた場以外を覆い隠すようなやわらかな、白とも灰とも黒とも言えるあのもやを。

神の見る夢のもや。それがマナなのだヨシタカ。

可能性であり、変化の源であり、神の意識である。
そして可変し、いかようにも変化する曖昧なもの。

それがマナなのだヨシタカ。

そしてそれはなヨシタカ、我々とはそう遠くも無いモノだ。

貴様も感じたことはないか？

うつすらと思いつけないか？ あるいはいつの間にか意識のうえに浮かび上がらないか？

さあ、目を潰れそして思い出せ、
あの暗く、あの白く、奇怪な感触を覚える、まるで暗い映画館で、
古ぼけた白いスクリーンに掠れたように映し出される映像を見るよ
うな夢の情景を。

あるいは、感じたことはないか？ 体験したことはないか？
真実そのものであるかのように実感できる、奇妙に明るくしかし突
拍子もない、あの一連の夢での情景を。

崖下、塔の下、建造物の高みより墜落する実感を。

火口から、地獄から、大地から、遙か天に飛翔する感覚を。

味わったことはないか？

なにもかもがありえるということ。

その世界にある、あの曖昧さ、次に何が起こるのか分からない無限
の創作の可能性。

変化と唐突さ、それらの無量の源泉たるもの……それこそがマナ。

神の夢たるこの世界は全てその曖昧で構成^{マナ}されている。

そしてその魔素、それを使って……神の見る夢にして神の魂に住ま
う我らは、

己が見る夢と魂に在る^{ものの}物者。

それらを描き出すのだ。曖昧ゆえに世界は実のところ如何様にも変わる事が出来るのだ。

夢ではどんな突飛なこともあり得る。夢に現れる登場人物は好き勝手に動き出す。

そしてどんな奇怪なことも、己の現実と誤っているこの世界にはありえないことも、容易くあり得る。

それもまた夢らしいことだ。

……我々は夢に生き、そして夢を見るのだ」

青年は理解に苦悩し、呻く。

あるいは理解出来たからこそその懊悩が呻きとなって漏れ出たのか。

「……つまり、私たちが見る夢とは、私たちの魂の内側の情景ということですか？」

「今の会話の流れで、それしか分からなかったのか？ 青年。

……だが、そうだ、その通りだ。
無意識的にしろ意識的にしろ、我々が見る夢は、我々が望んだ世界だ。

作り上げた世界と言ってもいい。

……我々が現実を生活している最中、そして眠っている最中も、我々の魂の中では、

我々が作った、願った存在が生きているのだ。

私は、私の中に住む者を私は大切にしたい。彼らは今このときも私の中で生きているのだから」

「それは、本当のことなのですか？」

「ああ無論だ。無論だとも青年。

我々は生きる、我の魂にある者も生きる。

世界にあるもや　　神の見る夢に、つまりは我々が認識するこの現実世界に、

私の見る夢をどれだけの精度、精密さで再現できるのか。

そしてどれほどの大きさで、どれほどの範囲を、どれだけの質で現せるのか。

その技量を競い、あるいは求道する者、それこそ、

それこそ魔導士だ！

神秘に生きる夢と魂の彫刻家、己の魂の造園家、そして一つの世界の造物主。

これらは事実ある。私があると、この矢本吉太郎はあると確信している。

ならばいま私が長々と説明したことも、確かにある、のだ」

青年は頭を垂れる。

女は動かない。

「では、私の見る夢、あの図書館、迷宮のような図書館は」

青年は胸に手を当てる。

「ここにあるのですか？」

「確かに、そしてこの上なく」

「曖昧で、狭く、不確かなあの夢の世界と、この確かな、何もかもが存在する、

この現実が同じようなモノとは思えません」

「それを整備するのだ青年、魔導士を志すものよ。

魔導士の能力、位階とは。……いやもっと正しくは魔導士の在り方とは。

夢の世界、また仮想の世界、また空想の世界をどれほど現実世界へ浸食出来るか、

そして速さや、精度や、規模や、高さを求めることだけではない。

己自身と、そしてその魂をどれだけ丹念にそして誠実に耕したか、だ」

「……それは、私の魂の世界、私の夢の世界は、また私が願った世界でもあって、

それは私が、強い意志と理性を持てば干渉する事が出来る、と言

たいのですか？」

青年の言葉を喜ぶように、老人は笑った。

「……そうだ。その通りだヨツキヨシタ力。

貴様自身が意識していなかった暗い願望や欲望、
あるいは抑圧され、押し込められた感情や記憶、
貴様の人生を決めることとなった、貴様の人格の形成の核となった
様々な経験に記憶。

また忘れていたそれら。

そういった無数のモノの表れとして、夢はあり。

夢の世界は在り、己のそういった出来事の象徴として夢に現れる道具がある。

そうだ、多くのモノが貴様の魂の世界を作るのだ。

いや、人の魂の世界、人が夢に見る世界を形作るのだ！

……例えば荒廃した、無数の燎原の火に包まれた世界。

あるいは無数の住民がお互いを犯し合っている世界。

あるいは湖面のみが存在し一人の釣り人が住む世界。

あるいは宇宙そのものとも言える世界に無数の空想生命が住まう世界。

そのどれもが人が好む好まからずに願い、人が生み出しざるを得なかった様々な想いの現れだ」

「では、私の世界は、そして時折、見えるあの景色は……」

「詳しくはわからんよ、私は貴様ではないのだからなヨシタカ。その風景をここに現すことができれば、また別だが。」

見もしないで、貴様の世界を判断は出来ん。
夢判断は恣意的なモノになりがちなのだ。

……ともあれ、その世界は魂にある。

個人がいつもいつも夢見る魂の世界は。
しかし曖昧で断片的だ。

それでも、我々はその世界を、こうして此处に現すことが可能なのだ」

老人は、言葉を切って、そして手のひらを天井と平行にして掲げる。

『火の切片、氷の残影』

老人が詠唱し、現れたのは、蒼く燦めく炎。

「これは私の世界の最小の構成単位。

道具級の顕現だ。

私の魂の世界。いつも夢見る世界を、詠唱を鍵に、あるいは幻想の糧として、

強く想像し、感じる魔素^{マナ}へと置き換えた」

青年は、口を開けて、呆然。

それは美しい炎だった。

『火の切片、雪の切片、切り株の陰、大木の冠雪』

そしてまた、変化が巻き起こる。

書斎は塗り替えられ、壁は消え、周囲を囲むのは大木の輪。

そして部屋の中には切り株。

降り積もる雪。空は雪を載せた大木の手に覆われ、

切り株の中心には小さな蒼い炎が燦めいている。

見れば、小さな女が座っていた椅子もまた切り株になっていた。

「これが小屋あるいは部屋^{ルーム}級だ」

青年は、その情景を綺麗と感じて、そして次に寒いと感じた。

「これが私の魂の中にある世界。

私が夢見て、私が育て、作り直した世界だ　　どうだ？」

青年はぼくと、世界を見ている。

「美しいか？」

ともあれここまでの物を造るには、才能と弛まぬ整備と訓練が必要だ」

「整備？」

「そうだ、私たちは、夢を世界へと現す。

しかし夢とはそもそも断片的だ。己の核となった経験を中心とした、曖昧な世界。

世界に現すには不備多く、支離滅裂なものだ。

そこでそれを使えるモノ　明確なモノとするためには、

先ほども言ったように己の空想の世界を整備する必要があるのだ。

悪夢の世界でなく、理想の輝く空想世界へとな」

老人が言うと同時に、世界が元の書斎へと戻った。

「空想の世界は現実にあるものではない。

置き換えられた魔素自体が元の状態へと戻ろうとし、
また夢見る神の無意識が、このあるべきではない状態を元に戻そう
と負荷をかけてくる。

世界は神の夢であり、その多くは曖昧さを内包しているからこそ、
こうして私たちが一時的に自らの世界へと変貌させることができる
が、

しかし何時までも、永続的にこの現実世界に在ることはない。

それこそまさに夢、現の夢の如く、一時の幻として消え去る運命に
あるのだ。

だから……ほれ、こうして維持を放棄すれば、この通り、あっとい
う間に元通りよ」

そしてまた、暗い書斎の中、ゆらめく蠟燭の燈りの中で、老人は滔
々と話を続けた。

「整備とは簡単だ、貴様の強く望むもの、理想とするもの、あるい
は己の思いを持って、
己の夢の世界をより精密に造る。

庭園に樹木を植え、花を植え、犬を置き、道を整備するように。
己の世界をより確かな物として作り上げていく。

まずは己の心の庭園にある道具からだ。
夢の世界であり魂の世界である我々の世界にあるものは皆、何かを
象徴している。

例えば鞭が鮮明にあるいは多く登場する少女の夢。
その少女にとって夢の鞭は己の虐待の記憶、怒りの感情、
そして加虐と被虐の象徴であるかもしれない。

それはしかし曖昧で、己の感情と結びついている。

だからそれを克明にするため、眠りに付いた折にそれらを確かな形
にするために、

その少女は努力する必要がある。

その道具と向き合い、その道具を認め、己の世界へと置き直し、
そしてその鞭に理想を仮託し、あるいはもっとファンタジックな、
楽しいモノとして、

自らの意志で置き換える必要があるのだ。

そして現実へと変換された鞭は、特別な異能を持って、彼女の望ん
だ異能をもって現れる。

また例えば、小屋の位階であれば、夢の世界を一つの小屋の分、確
かに整備し、それを実在する物として、魂に打ち立てる必要がある。

その内装、その部屋の効果、物理条件、道具、用途を設計する。
かつて夢見たそれを確かなものとし、支離滅裂な曖昧さを形のある
ものへと置き換える。

こうして魔導士は、己の理想の世界、あるいは悪夢の世界、象徴の世界を、より精緻に造り変える。

魂の世界とは抑制された悪夢、制御された空想、理性的な狂気に他ならない。

その開拓、己の魂の広大無辺をどれほど広げたのか、

それがまた魔導士の位階として考えられているのだ。

そうして造られた世界は、生きた世界でもある。

それまで混沌とした宇宙、無意識と感情、憎悪と希望が入り交じった無秩序の中を生きていた夢の住人達は、その整備された小屋、館、城、都市、国、大陸に住み生きることとなる。

勿論それはこの現実とは似ても似つかない、独自のルールと現象に満ちた世界だがね」

青年は納得、あるいは理解と疑問、あるいは恐怖の入り交じった複雑さを顔に見せている。

そして口を開いた。

「その魂の整備、でしたか？

……それはどうやって行うのですか？」

好々爺然とした顔で笑うヤモト。

白い髭、禿頭、刻まれた皺が揺れる。

「理論は簡単だがな、実践は簡単ではないぞ？」

まず強く念じ、そして思い、眠りに就く、あるいは仮眠、あるいは白昼夢、あるいは夜の眠り。

そのどれでも良いが、ともあれ眠りに就いた時に、己の意識を持って、魂の世界を整備する。

例えば、館級、城塞級の魔導士はその世界で人が暮らしていることが多いだろう。

夢の世界という、

様々な異様があり得る世界で、その魔導士が意味や理想をもって、己の心に人を造る。

意味をもたせて、あるいは己がこうりたいというような人や道具を造るには、

強靱な理性と奔放な想像力、抑えきれない程の感情をそれぞれ制御し、

また細部まで、

想像にありがちなあの曖昧さを持たずに、人や道具を脳裏に描き想わなければならないのだ。

まあ人を造るといふのは、かなりの難易度だ、
……まずは物質や現象、もっと己の記憶に刻み込まれた、
忘れ難い記憶や経験を象徴するようなモノから取りかかった方がよ
いだろうな」

理解出来たか？と言ってニヤリと笑う老人。

青年は苦悶に似た表情を浮かべながらも、頭に手をやり、

そして言葉を絞り出す。

「……どうにか」

「優秀だ、孤島の名門、四木の天才。

最後に付け加えれば、

己の魂にある世界を、大きく豊かに、精密に、細部まで造り上げ。

多くの象徴、一つ一つ意味と用途の違う想像や仮想を付与し、

練り上げたその世界を、現実を生み出す存在をもって、最高の魔導
士と言えるのだろう。

願わくば、期待の新人たる貴様にその頂にまで至ってもらいたいも
のだな」

満足そうに頷き、老人はそうして講釈を終えた。

そしてその場には、

大きく口を開いて笑う老人と、

最後まで微動だにしなかった女と

自嘲するように笑う一人の青年の三人が。

2021年のことだったが。

確かにそこにいた。

馬上の会話 疾走

「卓越した理性の、澄んだ矛盾の開拓」

ブリエル

ロンドンの魔導士 アーサー・ガ

「魔導とは何かという問いに」

1

馬が走る。

俺の乗る馬と、俺の前で騎士殿の駆る馬が。

かれこれ走り続けて、二、三時間は経っただろうか。

尻が痛い。慣れないことはするものではないな。

夜が空けるまでは、後二時間といった所か、

世界が変われば時間が変わってもおかしくないようなものだが、

しかし幸いなことに、この世界は何もかもが非常に、俺が元居た星と似ている星らしい。

元の世界とはそこまで離れていないのだろう。

隣にある部分の影響を、他の部分は逃れることができないのか。

まあ恐らく地球の神がサービスとして、わざわざこの世界を探したのだろう。

大きなお世話である。

空を見る。

暗い、雲と星の世界。

冷えた空気の中、月がこちらを見ている。

星の量は地球とは比べものにならないほど多い。

綺麗だ。

地球の記憶は未だにあやふやで、ところどころ抜け落ちている。あるいは実感出来ない程にその記憶が薄いのだ。

魂は健在、しかしそれは洗われた。

毒が脱けているのはいいことなのか、悪いことなのか。

他者から受けた強制的な浄化は、俺の心を歪めているようにも思え

る。

とはいえ、その洗浄がなければ、俺の精神はここまで静かではないだろう。

それも確かだ。であれば仕方がない、起きたことを考えてもしょうがない。

留め、反省し、前を向けばいい、それだけだ。

ということで、目前、厳めしい顔をした騎士殿に話しかけることにした。

（厳めしい顔以外を見ていないのだが、果たして彼女の表情筋はそれ以外の形に動くのだろうか？）

「それでカッセンまでは後どれぐらいだエルデル卿」

「……」

反応がない。

馬の駆ける音がする。遠く視界の片隅に森や、丘が映る。

「……エルデル卿？」

「……何だ？」

「聞こえているのなら返事をしてくれないか騎士殿。」

子供ではないのだ、で、後どれくらいなのだ？ 目的地は「

騎士は嘆息したらしい。

こちらに振り向いた。

鋭い、険に染まった眼差し。

白銀の鎧が月の光を反射して目に眩しい。

「……勘違いするなよ？ ヨシタカ。

私は貴様を完全に信用したわけではないし、
貴様を信頼しているわけでもないことを忘れるなよ？

貴様は不気味だ。

……貴様の発言に一理があり、
そしてまた貴様がおそらく国内の不穏分子ではないと、

そう考えて貴様の帯同を許しているに過ぎん。

つまり何が言いたいか分かるか？」

俺はわざと首を横に振った。

「気安く呼ぶな、ということだ！

……私は貴様に気を許している訳ではない」

そう言って銀髪の女騎士はまた前を向いた。

お堅い奴だ。とはいえそうこなくてはな。

不審者を信用しないというのは正解の反応だ。

無闇矢鱈に信用する人間はこちらも信用できない。

俺だって自らの正体を漏らすのは必要最低限でありたいのだから。

が、

「……余りピリピリしてもしょうがないだろう、騎士殿。

気が急いても馬が早くなる訳ではない。

呉越同舟、という言葉がこちらにあるのかは知らないが、

ともあれこうなったからには必要最低限の協力は必要ではないかね

？」

事実、先ほどまでは、ある程度の応答に答えてくれたのだから。

おそらく焦り、そしてやはりこちらを無意識に年下に見ていること、

そしてまた近接戦における己の実力への自負が、

先ほどまであった俺への畏怖を減じさせたのか。

それともやはり俺が信用できないと思い直したのか。

あるいはその全てであるのかもしれない。

そんなことを考えていると、

やがて騎士殿が器用にこちらへと振り向いた。

苦虫を潰したかのような、苦み走った顔つき。

一先ず納得したのだろうか。

馬の手綱を駆りながら、本当に器用なモノだ。

「そのような顔をするな騎士殿。

聞きたいことがあるのだがな」

「何だ」 憮然と答える騎士殿。

一々気にしてもしょうがないので、俺は話を続けようと思う。

というよりも、一々気にする程、俺が若くもないというのがあったろうが。

背の低さから自然やや見上げる形になる。

そこにある騎士殿は、しかし素直な反応だ、わかりやすく良い。

「そのハフカーズ伯爵とは何者なのだ？

いや、そもそも俺はこの世界の事を詳しくは知らん。

騎士殿の主についてもだ」

騎士アレーアは強ばった顔を少しだけ緩めた。

俺の言葉の真偽をはかりつつも、

先ほど見せたモノの影響か、

俺がこの世界、いや少なくともこの国の者でないことは信じたのだろう。

「……いいだろう、ただし姫については大衆が知っている程度のことしか話さん」

俺はそれでいいと頷き、騎士殿は諦めたように口を開く。

どうでもいいが、馬の手綱を握るのは大体40年ぶりだが、
うむ、なんとかなるものだなあ。 英国の乗馬クラブに感謝だ

「ハフカーズ伯爵は姫、私の敬愛する主、
ロドリア王が第七姫にして、衛星都市カッセン都市長アーバルシュ
タト様の婚約者だ」

苦々しげに騎士エルデルは言った。

苦々しい顔という題でスケッチしたくなるほどの、見事に感情を隠していない顔。

「婚約者なのか？」

「忌々しことにな。」

……ハフカース伯爵は28歳、姫は19と年齢は問題ない上に、姫がハフカースを信頼しておられる。遅くとも今年の秋までには婚姻の儀を結ぶだろう」

最初から最後まで、心底嫌だというような声音を崩さずに、前を向きながら声を出す。

「なぜ、姫は都市長を？」

少し話から離れるが俺は問いかけた。

騎士殿は珍しく表情を崩し、一瞬ボカンとしたが、その後、溜息を吐いた。

「……貴様、本当に何も知らないのだな」

「うむ、自慢ではないがそうらしいな、いや俺は無知というわけではないのだぞ？」

「どうでもいい。」

……ふん、我が西方委任王領、通称は西方王国では、各都市、各領地の長は、王の親戚、血筋、姻戚が務めるのだ。貴様の居た国がどういった政体を取っているのかは知らぬがな」

「血による統治か」

俺の世界でも中世ヨーロッパ、あるいは中華の長い歴史において見

られることのあつた政治的指向だ。

即ち息子が、そして父親が一番信頼に値するというのは普遍的にかつ時代横断的に見られる発想ではある。

あるいはナポレオンも、あるいはチンギスハンも、似たようなことは行っていたと記憶している。

「それでエルデル卿の主殿は、そのカッセンを任じられたのだな？」

「……その通りだ、忌々しいことにな」

忌々しいことが多すぎやしませんかね。

俺がそう思っている最中も、話は続く。

「姫は権力闘争で負けたのだ」

「ほう？」

「姫の母は民衆の出であつた。

それ故、後見の勢力が殆どなくな

謀殺されたのだ。

宮廷秘蹟士バルザックの知見を姫が得てなければ、姫自身の命も危なかったかもしれない」

第七姫、姫でそれほどの数ならば、

息子の数はいかほどになるのか。

そして母親の数も。

おそらく後宮ハレムのようなモノもあるのだろう。

そこまでは推測できる。

ただ、

「普通は王族の娘というものは、政略結婚のための財産、婚資として扱われるのではないか？」

「領地を得て放逐されたのはなぜか？　と言いたげだな餓……ヨシタ力」

いい加減、餓鬼と言うのはやめてもらえないだろうか騎士殿……

「まあそうだなそこが疑問だ」

「……姫は聡明な方でな。

また優秀な秘蹟士でもある」

「それは……」

他国に嫁がせようものなら何をしでかすか分からない上に、

また王都という政治の中心部に置いたならどんな策謀を働かせるのかわからない。

というところか。

「そして姫は王都から追放された」

「追放？」

「名目上は都市長の就任だがな、追放だ」

「穏やかならぬモノ言いではないか」

「カッセンはそれなりの規模の都市ではあるが、
王の娘に渡すには小さい、小さすぎる。

西方と東方の間の中継地の一つではあるから、栄えていないという
訳ではないが」

「……推察するに、その他にもつとよい道なり、都市などがある、
というところか？」

「……そうだ、古代帝国時代には貿易の中心地として栄えたことも
あつたらしいが、
今になつては主流の国道から外れ、北とも南とも西とも東とも最短
の位置にある訳ではない。

そもそも周囲を囲む小さな山の傾斜が、それを阻む、王都の北東に
ある小さな檻。

今では、麓のアランベン、あるいはより王都に近いニカアに交易中
心地としての座を奪われた、
王都に近いが遠い、古の都市だ」

最も完全に貿易がないという訳ではないのだがな。と最後に付け加
えた。

騎士殿の顔には怒り。

どうやら俺に向かって話している内に、自然怒りが湧いてきたらしい。

俺は会話の軌道修正を図る。

「……すまんな騎士殿、話を逸れさせてしまったか？ ハフカースに戻ってくれて構わん」

「いや、別にハフカースと遠く離れた訳ではない、むしろ今の話は前提として、

ハフカースに関係のあることだ」

言って、燦めく髪を掻いて、手綱を握りしめる騎士アレーア。

俺もそれに釣られて、知らず手綱を握りしめて、馬を見つめていた。

「姫は都市カッセンに送られたと同時に、王国の第四特務近衛騎士団団長を任じられた」

「特務近衛騎士？」

「脳が毒と野心で出来た姫の姉の献策だ」

「権力闘争か？」

「当然だろう、むしろ王は姫の母を特に気に入っていた。が、既にそれなりの権力を握っていた第二姫の派閥や、

現王妃　これは国王の従姉なのだが　がそれを許さなかったのだ。

各地の領主や領主内で一定の地位にある貴族や血族の企みとともにご母堂は暗殺され、

姫　アーシュ様は都市カッセンに放逐され、そして厄介な地位にも付けられた」

「その特務近衛騎士とやらはどんな地位なのだ？」

「王政府直属の騎士団として、王国各地の事件解決の走狗として走り回る役割だ」

何かを憎むような眼差し、騎士殿の怒りは頂点に達しているらしい。というよりも俺は思い違いをしていた。

この騎士殿、クールなのは見た目だけだ。

間違いなく直情径行、昔流行った言葉で言つのなら、脳筋ということか。

「嫌われやすく、そして重要で、しかも容易ならざる泥仕事というところかね」

「おおむねその通りだ。

ただの騎士であればよい、名誉ある仕事だろう。

……しかし姫は紛う事なき王の子。

このような仕事に就く立場ではない。筈なのだ、本来は。

その上、姫の立場では各派閥の領主は非協力的な立場を取らざるをえない」

「嫌がらせか」

「この上ないな」

そして騎士アレーアは自らの精神の高ぶりに気付いたのか、

大きく息を吸って、そして落ち着かせるように息を大きく吐いた。

俺は一連の話を、特段なんの感慨もなく聞いていた。

ただ一つ、留意すべきなのは情報を逃さぬこと。

無数の糸と糸を、それを逃さず結び逢わせて、推測を働かせるのだ。

こういう推測ゲームのようなものは昔から俺は得意だった筈だ。と記憶している。

俺の身体が、実際にこの身体と同じような年嵩だった頃。

未だ牢獄めいたあの書物館に閉じ込められる前に、
兄や友と一緒にそういった遊びを行っていた記憶がある。

まあ遙か昔のことだな。

「とはいえ騎士団なのだろう？」

何も姫一人で全て行うという訳ではあるまい」

「……確かに、だが人員は全て姫の近衛持ちだ」

「どうということだ？」

「王の子、高貴なる血筋は己の裁量で近衛騎士団を持つことが許されている。

逆に言えば伝手がなければ優秀かつ信頼できる近衛は形成できん。カッセンを守る第二旅団は完全に他派閥の犬だ。アーシュ様が王政府に持っている伝手は宮廷魔道士バルザック殿のみ。

配下の貴族とてアーシュ様のご母堂レイナシユタト様の数少ない後見でもあったメイザー子爵のみ。

……姫の近衛騎士の数が分かるか？」

俺は、少し頭を働かせる。

王族とはいえ、著しく少ない、というのは会話の流れからみて、まず間違いないだろう。

まあ、余り深く考えるようなことでもないか。

「……三〇、いや一〇位か？」

騎士は珍しく笑った。自嘲するように。

「二」

「は？」

「…… たった二人だ」

流石の俺も、驚きを隠し得ない。

顔を赤くし、あるいは蒼くし、感情豊かに、怒り嘆く騎士アレーア。

「これで、これで何が出来るのだ!？」

嘆くように静かに、何かを堪えるようにアレーアは言った。

静かな、だが深い怒りを感じる声音だ。

俺に何が答えられるのか。

少なくとも俺は政治家でなく、そして貴族でもなかった。

精々が魔導士、この世界だとおそらく秘蹟士と呼ばれているそれに過ぎず。

良く見積もっても、俺は大量虐殺者に過ぎない。

この騎士の真つ直ぐさは、俺の心に痛い。

「掌握出来る範囲さえ覚束なく、

都市の太守としての役割もある。

メイザー卿は代官として経験豊富だが、やるべきことは多すぎる。
焼け石に水だ。

そして私は……」

その先は言わなくてもわかった。

俺も鬼ではない、突っ込んだりはしない。

恐らく騎士殿はそういった行政方面では全く役に立たないだろう。

……

………

馬は変わらず走る。

いよいよ陽が空に上がり始めたのか。

東の空は白み、

そして橙の色、赤、薄い蒼、淡い空色、深い？とグラデーションを
描いている

世界は変わっても朝陽の美しさには変わりはないのだな。

俺はなんとなく、思った。

馬は変わらず走り、そして道は傾斜を持ち始めていた。

2

朝陽は上る。

地平を越えて、世界を赤と黄の光に染め上げようと考えているらしい。

俺は昔から太陽のその傲慢さが嫌いだった。

俺の世界にはその証拠のように一切太陽が存在しない……筈だ。
少なくとも抑制した範囲の外に、無意識に太陽を造っている可能性を完全に否定できないが。

騎士殿は、再び口を開き始めた。

色々と昂ぶつたらしい騎士殿が落ち着いたとも言つ。

「……ここからが本題だ」

「長かったな」

「貴様が無知に過ぎるのだ、面倒な餓鬼め」

「とうとう餓鬼と言ひ切りおつて」

「歳上だというのなら年相応の格好をしろヨシタカ。
少なくともその形はやめろ。やりにくくてしょうがない」

素直な奴め。騎士殿は直裁だなあ。

「俺にとっては騎士殿は孫でもおかしくない歳なのだがな」

「……到底信じられんな、貴様」

如何にも訝しげ。

本当に素直な騎士殿である。

とはいえ、何時までもこの調子ではいかんだろう。

「……続きを頼む」

言つと、あちらも下らない問答に時間を取りたくないのか本題に戻る。

しかし、あれだな、本当にわかりやすい奴だ。騎士殿は。

というか根は素直な直情型なのだろう。

それを無理して押さえ込んで、クールを装っているのか。

なんだかんだとこちらの疑問に答えてくれる辺り、頭は余りよろしくないのかもしれないが。

「一年前に遡るだろうか、姫は一つの任務を政府から課せられた」

俺の失礼な思考を想像もせず、騎士アレーア・エルデルは話を続けた。

「聞くからに面倒な任務だった。

……王国各地で発生していた山村消失事件、その解決」

思い出すだけで忌々しそうに、馬を駆る騎士殿の言葉。

俺は軽く相槌を打つに留め、先を促した。

「広い領地、全く原因が分からない、検討も付かないが、

当時、田舎それも山間にある辺境の村が何者かに襲われた事件が頻発していた。

その原因を掴み、その村の消失を食い止めることが私たちに下った任務だった」

「それは不可能ではないか？」

よくは知らないが、

今までの会話の中で、姫様とやらが使える人数と、

一つの国家の平均的な広さを予想すれば、普通はそういう結論になるだろう。

「実際不可能に決まっているだろう、そんなもの」

騎士殿は、吐き捨てた。

「政略か？ 露骨すぎるが」

なんともはや、隠す気もない。

どれほどの騎士殿の主とやらは低い位置にいるのか。

仮にも王族であろうに。

「その露骨な政略が好きなのだよ奴らは」

吐き捨てるように騎士は言った。

傾斜はいよいよ激しくなっている。

もうすぐなのだろうか。

見ればいつの間にか陽は地平から上がりきっていた。

「余程、ご母堂が憎いと見える」

「それもある。

そして奴らは目障りなのだ、我が主が……

まあよい、それでも姫はせめて解決に動いている態度を見せる意味合いを込めてな、

……私を派遣した」

「その被害にあった村にか？」

「そうだ、……何者かに襲われた爪痕、しかし人は誰一人としてその場にはいない。

案の上、目撃者も居ない。人知れず闇へと消えていった村の謎」

「何も掴めなかった」

俺の言葉に小さく頷く騎士。

馬の揺れかもしれないが。そして顔は相変わらず不機嫌そうだ。

「……そうだ、私は様々な地方を訪れた。

そして、その間にも事件は起こり、

同時に呼応するように失踪事件まで相次いだ」

「そんなに主の下を離れても大丈夫だったのか？」

「姫の数少ない戦力である私が、外へ出ることへの不安は当然あった。

が、それでもメイザー卿が警護隊を編成し、

己の従士をそこへ務めさせ、また旅団を切り崩すことに成功しつつあった。

だからこそ出来た真似だ」

そのメイザー卿なる人物は中々に優秀らしい。

それにこの人に懐かない猫のような警戒心に満ちた騎士殿が、その人柄を全く疑っていない。

おそらく忠臣なのであろう。

姫の命脈は危うい均衡の上に成り立っているらしいが、それはこの騎士殿や、

そういった忠臣によって支えられていることが想像できた。

「それでどうなった」

「……姫への風当たりはいよいよ強くなった。

姫も度々王城に呼ばれることが増えてな、気丈そうに笑ってはいたが憔悴は隠せていなかった」

何かを思い出したのか、いかにも痛ましそうな声だ。

俺の最初の師だった老人が、俺の後の師たる『銀河の騎士』を心配する時の顔に似ていた。

「そこで、登場するのが件の」

大きく頷くアレーア。

鎧に背負った槍も釣られて揺れた。

白晳の美貌は、歪む、というよりも先ほどから歪んでばかりだ。

「ハフカースだ。

士官学校と特別士官学校を主席で獲得した、奴が現れた」

「優秀だな」

「優秀すぎた。

多くの妬みを買って、兄と父にも疎まれた男だ。

曰く辺境の王弟自治領に召し抱えられ、多くの武功を建てたと聞いたが」

騎士は首を振る。

俺は情報を聞くことしかできない。

「それでどうなった」

「最初、私たちは、姫も含めて警戒した。

……当然のことだが、我らには敵が居ても、
味方が居たことは少ないのでな。

それでも奴は王弟派だった。

王弟派は現在の王の後釜を狙っている。

それ故に王位を狙うような大派閥と争いはすれど、

私たちのような派閥とも言えない弱小勢力などにかかずらっている
暇はない。

むしろ……」

「積極的にとりこむか？」

「そうだ、姫は野心も薄かったからな。

最終的にはハフカーズが逗留することを許した」

ふむ、と俺は手綱を制御しながら、考える。

傾斜を上る、森と土の険しさに囲まれた峠を馬二頭が走る。

「……そして政治に口を挟むように、なったか？」

「……貴様の言うとおりだ。

疲れた姫を労い、やがて徐々に姫の仕事の相談を受けるようになり、

そして次第に姫もあの男を信頼していくようになった」

「迂闊な」

「姫を責めることは出来ない。

私が不甲斐ないのもあるが、圧倒的に人が足りなかったのだ。

その中で多くの知見をもった男……」

「甘いマスクの」

俺は茶々を入れてみる。

わからないが若かりし頃、まあ今も若いのだが（身体だけ）

その頃はこういった巫山戯たことを言うようなゆとりがあったような気がした。

忌々しいと（この騎士殿はこの顔を作るのが本当に好きらしい、何度目だ）

騎士アレーアは頷いた。

「物語に出てくるような美丈夫に優しくされ、そして今まで苦悩して進めていた仕事を理解して、

有用な意見を送る男が現れたのだ。姫　　アーシュ様がほだされたのも無理はない」

どうでもいいが、俺はこの騎士の言葉が、慣れ親しんだ日本語に聞こえるのだが、

俺の言葉も多分この世界の言葉に聞こえているのだろうか？

おそらく何者かが俺に関するこの世界における法則を変更したのだろう。

（明らかに神しくないのだが）

現実とて曖昧なモノなのだからおかしいことではないのだが。

しかし不思議だ。

「だが騎士殿は疑いを持ち続けた」

「ふん、どうにも警戒心が拭えなかったただけだ。」

私は姫の剣だ。

私と、小メイザーの役目は姫の敵から姫を守ることなのだからな」

騎士殿は、本当の意味で騎士らしい。

まるで地球の中世にあった騎士道物語に出てくるような騎士。

ありもしないと当時から考えられた空想の騎士のような存在だ。

一歩間違えればドンキホーテになりかねないが。

この世界ではこういった信仰が生きているのだろう。

「そして徐々に姫から信頼を勝ち取ったハフカースは、やがて己の私兵を動かし、あるいはコネを使って、件の事件解決の指揮を執り始めた。

ハフカースがカッセンに訪れて三ヶ月程だろうか、

奴は姫の政治的相談役としての座を既に確固たるものしつつあった。

私は、奴への警戒を隠さなかった。

姫に度々進言した、警戒をと、同僚の小メイザーも同じだ。

それでも姫は笑って、大丈夫と言った。

そして奴の指揮下に服することとなった。

……私は奴の命令に従って様々な場所を訪れた」

騎士殿は一息吐く。

その場面を思い出しながら言葉にしているのだろうか。

「次々に、私が一人で探していた時には現れなかった、襲撃の痕跡や証拠が見つかった。」

奴のハフカースの分析と情報収集から、幾つかの襲撃地点を絞り込みをもした。

そしてとうとう件の襲撃者と鉢合わせることさえもあった」

堂々と馬の手綱を操り、巧みな技でこちらと併走している騎士殿。

傾斜を警戒してか、その速度は余り速くない。

と、俺の目の前で、急に馬を止めた。

どうしたのかと、俺は騎士殿の顔を見る。

どうでもいいが、

相変わらず、もし俺が中学生だったら、目があっただけで顔を赤く

していただろう美人だ。

何かそういった感覚が懐かしい。

工口本とかこそそと買ったのを思い出した。

妹に怒られたものだ。

なぜ今更このような大昔のことを思い出したのかは不明だが、
肉体に意識が引きずられているのは明らかだ。

何時からだったか、そのような平和な日常が破綻を来したのは、
いや今はどうでもいいことが……

「……休憩だ」

言って、騎士は意外に軽いらしい鎧を揺らして、馬から下りる。
槍を地面につけぬように、槍を手にとっての下馬だ。

俺も後に続く。

とはいえ、馬に乗る機会自体が珍しいので、手間取りながらだ。

騎士はこちらを呆れたように見ている。

「……貴様は貴族学校か、士官学校に通っていなかったのか？」
秘蹟士の分際で、と言いたげに目が細められた。

おそらくこの世界では一定上の魔導は、いや秘蹟だったか。

それは相応の地位のものが通う学校か、
もしくは市民から秀才を選抜する教育機関で教わるモノなのだろう。

そしてそこ、でその他のことも学ぶ。

しかし生憎こちらの最終学歴は高校中退だ。

蔵書の地獄で得た無駄知識や、組織時代の魔道教育はあれど、

政治とは無縁、そして常識も持ち合わせていない。

さらには趣味も。

む？

これでは俺が寂しい奴みたいではないか。

……

………うん。

「文化の違いだ、騎士殿」

結局、騎士はどうでもいいことだと鼻を鳴らして、こちらを見下した。

手頃な石に俺と、美麗の騎士が座る。

講談に出てきそうな美人。

そして女騎士。

向かう俺は、

ユニなんたら 懐かしい、かつてそんな衣服の量販店が存在した。

二〇五五年の第三次大恐慌までは

で見繕ったかのような服。

地味な割にはこの世界では思い切り文化の違う服で、

その上には組織のロープ。それも最下層の時代に身に付けていた赤のロープ。

これから下りを滑走してカッセンらしい。

そのために馬を休ませるとのこと。

騎士殿は、槍に常に触れて、こちらと2 m程離れた地点で地面を見ていた。

信頼されていないのは明らかだ、しかし上等。

などと奇妙な対抗心を燃やすほどの気力もない。

とりあえず騎士殿に目を合わせて話を促すことにした。

「それで？」

ハフカースはどうなったのだ」

あるいは騎士殿も話を再開する機械を窺っていたのか、

こちらを一瞥した後に、言葉を作り始めた。

全く難儀な性格の騎士殿だ。

「そうだな、その後、

奴が指揮を執るようになり実際、

その被害、事件発生回数は大分少なくなった。

……いま思えば露骨と言える程に」

「痕跡や証拠もか？」

騎士は頷く。

水飲みを口に含んでいる。

俺の手元にはないので物欲しげに見ていたら、

哀れんだのか、予備の水飲みを投げて寄越してきた。

「有り難い……そして騎士殿は今回もその流れの中でいつものように、命令された地に単身で赴いたと」

「然り」

俺は空を見た。

特に意味はないが。

しかし此处でもやはり空は碧い。

ともあれ、一連の流れは聞いた。

考えよう。

何かの目的があつて、件の伯爵殿はこの地に訪れた。

そして姫に取り入った？

気になるのは、件の事件との関連。

怪物の類。魔導により造られた怪物が関係しているのだろうか？
その伯爵が。

いや断定は出来ない。

とはいえ任務の先に派遣され、そしてそこに居た強敵。

少なくとも衛士、そして村に一人、魔導士が居て、

魔導で造られた生物を指揮していたことは間違いないだろう。

一人は衛士、一人は……あの幼女か？

俺を引き留めたのも騎士殿と引き合わせ無力化するためだった？

そして姫との婚約。

なんとなくだが、掴めてきた、おおむね仮定、というよりも想像の通りである。

が、

「これはもしかしてそのハフカースが何かを企んだという証拠自体はないのでは？」

騎士は、腕を組む。

そして目を瞑り、

頷いた。

「ふむ……そうとも言えるな」

俺は眼の前の騎士を、生暖かい目で見た。

……

ま、まあいい、とりあえず怪しい奴が居る。

心の弱い姫をたぶらかしたその伯爵が、邪魔者を始末しつつ何かをしている。

それだけ仮定できれば十分だ。

俺の反応を見て、不満そうに騎士が言う。

「……私の直感がな、どうにも引っかかっているのだ」

「まあ、騎士殿から聞いた状況の話だけでも、その伯爵とやらが大分胡散臭いというのは理解出来た。

……そろそろ行くつか」

俺が言うよりも早く、既に騎士殿は馬の傍に居た。

俺は馬に乗るその背に声をかけた。

「で、いいのか？」

振り向かずに騎士が言う。

「何をだ」

「俺にここまで話しても」

「はっ、この程度のこと。」

姫についてはな、耳聡い市井の者でも知っていることしか話しておらぬ。

そしてハフカースについてはな、私が遠慮することなどなにもない
！」

俺は思わず笑っていた。

全く思い切りのよい騎士であることだ。

長い会話と乗馬運動が効いたのか、俺の意識も大分本調子に戻ってきたようだった。

幾らか転移前よりも若い気もするが。

まあ、とりあえず全く見ず知らずの地での足がかりとしては十分か。

馬は走り、駈け抜ける。

山をすり鉢と見立てるなら、そのすり鉢の一角を、振り向くことなく駈け抜ける二頭の馬。

早朝ではない時間、しかし昼でもない朝。

騎士と、一人の不審者は、衛星都市カッセンへと到着した。

到着 登城

「位階 全ての悪夢の整備の度合い」

ロンドンの魔導士、アーサー・ガブリエル

1

カッセンは城門に囲まれた都市であった。

周囲の山と、城壁の二重の壁に守られた、どこか閑静な印象を与える都市。

見れば古い城壁もある。

先ほど騎士殿がチラッと口にしていた古代帝国時代とやらの建築をそのまま流用してるのだろうか。

騎士アレーアは城門の守衛 多分警護隊、あるいは軍兵 の詰
め所。

そこに駆け込み、ものの数秒で身分を証明して、速やかに都市の内へと入り込むことを可能にした。

都市の内部は、賑やか、とはいえ地球の都市と比べるべくもなく、

また規模の小ささのせい、その人の賑わいにはどこか余裕がある。

悪く言えば隙間の目立つ賑わいか。

都市の外を囲む畑を耕している者や、

あるいは山で獲物を追っている者が、

詳しくは分からないが、都市近郊の住民が市を立てているらしいことが窺えた。

その他、行商人の出店もあった。

「騎士殿」

「……なんだ」

ぶすつとした声。

柄にもなく喋り通したことを恥じるかのような声。

というか多分その通りなのだろう。難儀な性格だ。本当に。

「目的地は？」

「とりあえず城に行く前に、メイザー卿の屋敷に」

言つて、遠くに見える巨大な館、といつても大貴族のものとは言えないような大きさの屋敷だ。

俺はとりあえず頷いておく。

行くべき所もないのだ、従うまでである。

今のところは、全くの異世界とはいえ上手くやれている。

うむ、気に入らないが、神に感謝だ。

そして数分で到着、

南の大通りらしき道を進み、

そう時間は掛からなかったところを見ると、やはりか、余り大きな都市ではないようだった。

屋敷、辺りを囲むのは石造りの壁。

中には庭園。

大きさは日本の団地住宅を一〇ぐらい合わせたほど。

やはり大きいことは大きいが、そこまでもないようだ。

騎士殿は馬を、馬丁に預けたので、俺もそれに倣った。

まさかこの歳になって、異世界で馬を操ることになるとは思わなかったが。

上手くやれたようで、ほっとした。

そんなことを考えながら、降りた騎士殿に続く、

馬丁がこちらを睨むのは、恐らく彼が騎士殿のファンであるのか、あるいは俺がいけ好かない貴族の餓鬼で、騎士殿を煩わせていると勝手に推測を立てて腹を立てているのか。

もしくは一四から一五歳の餓鬼の癖に偉そうに、と思っているのか。
うむ、そのどれも当てはまるのかもしれない。

と、そんなことを考えながら騎士殿の後を付いていくと、館の大扉を開いて、一人の女性が出てきた。

白いドレス、いやワンピースか？

蒼いシヨール、銀の腕輪、上品な仕立ての皮のコルセットがドレスから透けて見える。

うつすらと透けるコルセットとその下に見える肉体が麗しい。

ふむ、俺がもう幾らか若ければな。

肉体はまあ、若いらしいのだがな！

……

……

うむ、調子が出てきたか？

分らない。

老いと、若さとあるいはそのどちらとも付かない混在とした意識だ。

もつと昔は何処にでもいる餓鬼だった筈で、

島から出たときは慇懃な、あるいは丁寧な馬鹿で、

そのうち、己を開放して、まあ、なんだ、少しはっちゃけて、

そして狂気に墜ちて、

死んだ。

我ながら阿呆だな。

俺が郷愁に浸っている隣で騎士殿が声を発した。

「メイザー！」

「アレーア！」

メイザー、恐らく先ほどの会話で小メイザーと呼ばれた人物か？

切羽詰まった、鬼気迫った表情でこちらに駆けってくる。

長い黒髪。騎士殿に似ていると感じた。

おそらく彼女も無表情型か、冷静型のだろうか。

しかしそういった印象を与える筈の彼女の美貌は焦燥で歪んでいた。

「騎士アレーア、遅いのではないですか？」

「色々あったのだ、断れぬ用事がな、それよりもメイザー、こちらで至急話を」

「そんなことよりも、一大事ですアレーア卿、姫が」

そこで、一瞬俺の方を見る。

美貌。というか美人ばかりだなこの世界は！

しかしこちらは騎士殿のような輝く美貌、あるいは透明を思わせる美貌というのではなく。

どこことなく神秘的な、あるいは古代の姫を思わせる、悪く言えば陰気な、陰のある美である。

「こいつは構わんメイザー、話を」

「ですが……いえ、貴方が言つのなら信用しましょう。
大変なのですアレーア、……姫の婚姻の儀の日取りが昨日、決まり

ました」

今度こそ、騎士殿は絶句した。

目が飛び出るかという程に、目を見開き、そして口を開いた。

屋敷の噴水が遠くに見える。

綺麗に揃えられた庭木が美しい、良い庭師を雇っていると脈絡もなく思った。

「ば、馬鹿なことを言うな！？ ……っ、冗談ではないのだな」

「そのようなこと、姫に関して私が言うことはありません」

「ふむ、急だな、そして露骨だ、一番の邪魔者を始末したつもりだったか」

言うつと、その軽い物言いに怒りが湧いたのか騎士殿が槍を握りしめ、そして得体の知れない物を見る目でメイザーがこちらを睨む。

どうでも良いが、おそ微妙に透け気味のワンピースドレスは趣味なのか。

「この者は何者ですか？ アレーア卿」

「そ、そんなことよりも姫は」

「落ち着け、とりあえず方策を話し合っべきだろう?」

騎士殿は、そんなに落ち着いていられるか!と今にも叫び出しそう
だ。

俺は念の為ポケットに入れておいたミニチュアを握りしめる。

が、横合いから、メイザーの声。

「貴方が誰であるのか知りません。

そして私が貴方を信頼も信用もしていないことは百も承知でしょう
が、

しかしその言には一理あります。

中に入りましょう。そしてアレーア、落ち着きなさい」

しばしの逡巡の後、苦しげに頷いた騎士殿。

余裕が無い騎士殿だ。

ともかく、

とりあえず俺と騎士殿は、大人しく屋敷内部に案内するメイザーへ
と付いていくことにした。

この屋敷入り慣れているらしい騎士殿に、負けじと胸を張って俺も
中へと入る。

屋敷の中は、典型的な洋館の様式。

大広間、ありきたりな絵、花、それらしい典型的な赤い絨毯。

かつて自称「古いにしえから続く貴族」やら「華族」やらの屋敷に行ったことがあるが、

どうして貴族という連中は揃いも揃って形から入りたがるのか、

あるいは、内装に自信のない者が、それを取り繕うために定式に頼るのだろうか。

とりあえず、取り立てて言及すべきところはないその屋敷の中を進む。

窓からは光。

歩く。

そして部屋に案内される。

そこには幾つかの椅子と机があった。

その場には紙。あるいはそれは全て国内に関する情報なのか。それが散乱していた。

「座ってくださいアレーア、そちらの方は」

「ふむ、流れの魔導士、いや秘蹟士というのだったか？ それだ」

本当なのですか？と言いたげに、アレーアを見るメイザー。

目のやり場に困るような、困らないような妙に生地の薄いドレスだ。もつと若かったなら俺も喜んで目の保養などと言っていたかもしれない。

「……そうだ、協力者、かもしれん」

齒に何か挟まったかのようなものいい。

「なんでまた曖昧な物言いなのですか？」

そして溜息を吐く侍女。

しかしその反応は中々に失礼ではないか？

という俺の思考。傍で見ていて思ったが完全に俺は不審者扱いらしい。

まあ、しょうがないことか。

ん、というかなんだかふわふわしているというか、我ながら思考と調子にぶれがあるな。

その俺の懊悩を尻目に、二人は話を続けていた。

「ともあれ、何があつたのか話して頂けますか？」

とりあえず、騎士殿と俺で掻い摘んで事情と推測を話すことにした。

……

……

「……それが本当だとすれば、露骨に怪しい話ですね」

それが第一声であつた。

騎士殿は性格なのか、背筋を伸ばして椅子に座っている。

俺は性格なのか、深く椅子に腰掛け、微妙にくつろぐ。

「妙に態度のデカイ子供ですね」

「子供ではない」

「でなければ何ですか？」

「老人かな」

メイザーは方を竦め、こいつはなんなんだ、と言いたげに騎士殿を

見た。

「……自称老人の、何だ？」

「なぜ俺に聞くのだ？ というよりも騎士殿、微妙にへっぽこにならないでくれ」

へっぽこではない。と口を開こうとしたアレーアを止めたのはメイザー。

「そんなことはどうでもいいので、早く話を進めてくれませんか？

あとアレーア、この自称老人は本当に大丈夫なのですか？」

騎士アレーアを十分に操作しているらしいメイザー卿。中々興味深い関係のようだ。

興味深げな俺の顔を眺めながら、騎士殿は小メイザーを見る。

「分からぬ。

ただ、少なくとも何処ぞの派閥の者ではない、と思う」

「その根拠は」

俺を見る騎士殿。

目を瞑り、そして何かを諦めたのか、それとも覚悟を決めたのか。

「私の勘だ」

「アレーア……貴方」

「聞け、少なくともこの国の者ではないと、私は思う。

こいつは不審だ、そして怪しい、さらには餓鬼の癖に生意気だ。

そして偉そうだが、少なくとも、少なくとも姫に害を為すことはない、と思う」

二人の近衛は見つめ合い。

やがてメイザーが視線を外し、参ったと言いたげに息を吐いた。

「分かりました、アレーアがそこまで言うのです、一先ず置いておきましょう」

「……我々はそれほど手の込んだ罠を仕掛ける必要があるほどの勢力でもないしな」

「それを言ったらおしまいだろう!？」「それを言ったらおしまいでしょう!？」

声が被る。

というよりも身も蓋もないことを騎士殿は平然と言う。

思いの外、思い切りが良い。

なんとというか第一印象が時間と共に化けの皮として剥がれていくタイプというか、

うむ、なんだろうなこのほこっとする気持ちは。

故郷の友人を思い出す。

「で、どうするのです?」

「決まっている、姫に直談判だ」

「言うと思ったが、まあそんなものだな」

情報交換は済んだ。

姫は結婚するらしい。

昨日、騎士殿が襲われて、すぐこれだ。

もし、件の伯爵を犯人とするのなら（十中八九そうだろうが）
畳み掛けてきたのだろうか。

件の伯爵が、騎士殿の主たる姫の信頼を着実に勝ち取ったのは如何なる理由か。

やはり、分らない。

が俺の経験からすれば、多くの人間の行動の原理は欲望の域をでない。

信仰、知識、性、富、地位。

世界が変わっても人は変わらない。と信じれば。

そしてこの世界は前に居た世界と近い部分にあるらしいことを考えるならばなおさら。

「まあ、とりあえずそれで行きましょうか」

取れる選択肢は多くありませんから、と零す小メイザー卿。

「うむ、反応を見て、その後また会議だな」

俺が言い終わるかどうかというところで、騎士殿はついだという調子で小メイザーに質問を浴びせる。

「メイザー、父君は？」

「庁舎の方で執務です。」

婚約の儀の手順も、推し進めています、肅々と」

俺は疑問に思ったことを口にした。

「……そのメイザー卿とやらは、……何だ、その、疑問に思ったりしないのか？」

小メイザーは肩をすくめた、アメリカ人みたいだが、癖なのだろうか？

騎士殿が補足する。

「メイザー卿は子爵だ、騎士位という一代貴族位の、私のような名ばかり貴族でこそはないがな」

自嘲するように言ったが、そこには己への自負も垣間見えた。
騎士位というのは此処でも最低位の貴族なのだろう。

おそらく実力で勝ち取ったのか。

「メイザーの家はな、

その小メイザーの祖父と父が勲功多きということだな、その位を授かったばかりの新興の貴族家だ。

メイザー卿はアーバルシュタト様のご母堂レオナシュタト様の近衛騎士長を務め、

遠くの領地、あるいは都市を授かったレーシュ様の代官として各地でその統治にあたった方だ。

シュタトの血筋の守護者とも言われる頼りになる方だが、欠点がつあってな」

話を聞く限りでは中々大した人物のように思ったが、欠点？

小メイザーも異論を挟んでいない。周知の欠点ということか。

「忠誠の形なのだろうがな、命令に異論を挟まないのだ、メイザー卿は、

勿論な、遂行の上での困難や非合理的な点は問いただす上、命令を受けるときにはその難点も挙げるが……」

嘆息するメイザー。

「父は、一度受けた命令は、直接撤回されるまでは、必ず遂行します。

愚直なのですよ、まさに」

面白い人物のようだった。

忠誠、絆。

騎士。

世界が違えば人は違う、それは当然のことだ、

しかしやはり文化が違う。

俺の生きた時代は、行き過ぎた個人主義とその反動としての全体主義が横行した時代だった。

再び不死鳥のように蘇った、ファシズムの下、世界各地で先進国への戦争や紛争が始まっていた。
マルチチユードなど夢だった。

人は過ちを繰り返す。

循環しながら進む歴史ではない、波のように浮き沈みしつつ進む歴史なのだ。

こちらでも殺伐している。

しかしそれでもどこか輝いて見えるのは、
俺が異世界人で、その上老いたからだろうか。

少なくとも愚直な家臣などという存在が、実際に居る世界なのだ、
此処は！

「……分かった、ともかくまずは城に向かわなければな」

話は理解出来た。些事にかかずらっている暇はない。

「二〇分後、この屋敷の大広間で集合しましょう」

今すぐ行かないのか？

という俺の眼差しに答えるように騎士殿は扉に歩きながら言葉を作った。

「私の服装をな、少し汚れていないモノへ」

「そして私も正装に……というよりも着替え途中でしたから」

むう、騎士殿も流石にそこは気にするのか、

というよりもメイザー殿はその服装、別に趣味という訳ではなかったのだな……

「貴方が、どのような不愉快なことを考えているかはその表情で分かりますが」

やめていただけますか？

すまんねえ。

登城の時間。

城と行っても砦と言った方が正しいだろう。

古代の建築物を流用改装したらしい、古くそれでいてどこか趣深い砦。

四階建てか、敷地は今居た屋敷を数戸以上合わせたよりも巨大だろう。

形は無造作にも見える四角型。ところどころに窓。

砦の周りには堀、操作式の橋があり、門番がその入り口を見張っている。

それはいいのだが、問題は俺の隣を歩いているメイザーの格好だろう。

正装 先ほどのドレスの上に、？い無地のドレスにも似たしかし地味な格好。

胸元を覆い隠す白いエプロンとネクタイ。

？いふわりとした生地、下に見えるのは先ほどの淡く透けた蒼いドレスか。

コルセットがウエストを引き立て、胸と背筋も恐ろしく綺麗に見せている。

手には肘まで伸びる？いグロブ。上質なモノと窺えた。

どこからどうみても、これは、

「メイドか……？」

「侍女？」

侍女と聞こえたのか。

しかしどういった原理でこの言葉は変換されているのだろうか？

どうでもいいことが。

俺は、頷いて、メイザー卿を改めて見る。

やはり、どこからどう見てもこれはメイド。侍女。

「ええ、御察しの通りです」

当たっていたらしい。

いや、まさか着替え途中と聞いていたが、

うむ、メイドとはな。

確かにあの格好で、その後どんな姿に着替えるのか、と言われたら容易には浮かばないが。

「メイザーは姫の侍女にして警護だ、ヨシタカ」

「一応侍女は副職、本職は護衛です。

第七姫アーバルシュタ트가近衛騎士メイザー・P・ファン・レオーナシュタト・メイザーです。

今後ともよろしく願います」

「う、うむ…… よろしく頼む、ヨシキヨシタカ 四木義堯だ」

メイドか、いやさ、何故かメイドを見ると胸がドキドキするな、うむ。

若かりしころの話だが、俺が島に住んでいた頃に居たオタク趣味の友人が、

（秋葉原が独立したのが2046年として、2017年の頃だったか、俺が蟄居する直前の頃だったな）

己の熱い想いを、メイドのすばらしさを語っていたのを思い出すな、うむ。

それ以来、俺の人生が一番順風満帆だった頃に、その時の影響かは分からないが

メイド喫茶に通い詰めていた頃があった。

まあ、別にメイドが特段好きという訳ではないのだがな、単なる昔の郷愁だろう。うむ、それだけだ。

「……アレーア、何故この自称老人の子供は、私の方を見ると目を細めて、心なし嬉しそうなのですか？」

「ぶ、不気味だな、そう悪い顔でもないのだが、今はまるで犯罪者のようだ」

そう言つて、騎士殿と侍女殿は俺を不気味なものを見るような目で見てきた。

……不本意だ。

4

ともあれ登城することとなった。

顔パスで橋を渡る。

俺にだけ、門番がやけにガンを付けてきた。

恐らく両手に花であることを羨んでいるのだろう。

「で、どこに向かっているのだ？」

「謁見の間としても使っている大広間です。

このまま中に入って通路を進んで三階にあります」

「階段と通路を幾らか進む。

よく陽の入る部屋だ、今の時間はとくにな。

謁見の間と言うには、まあ少し広い広間といった程度の部屋で、少々不相応だがな」

言った騎士殿を見れば

鎧は先ほどのままだったが、槍を剣に変え、また下履きやその他の衣装を変えたことが窺える。

俺の隣には侍女メイザー、

歩く度にエプロンとシックな印象の茶色の混じった黒色のドレスが揺れるのが目に眩しく麗しい。

俺は変わらず、懐かしい量販店のジーンズとシャツ、そして組織のローブ。

ペンと迷宮のミニチュアは一番取り出しやすいポケットに。

歩いて数分。

眼の前に少し大きな扉。

「それでは入りますよ」

と言う前から騎士殿は扉を開けていた。

怒鳴り込むように、まるでクレームをつけに行く客のような剣幕だ。おそらく扉を前にして、件の伯爵と婚約への疑念と怒りと不満が思い出され、そして抑えきれなかったのだろう。

猪みたいだ。

「猪みたいですね」

「……うむ」

中に入ると、石畳に燭台、そして広い窓が四つ、殆ど部屋の一面が透けており、人々の生活が見通せた。

部屋は事前に言われていた通り、さして大きくはなかった。

奥には豪華な椅子。

長い金の髪、白い清楚なドレス、そして？いネックレスが特徴的な美しい女が、脚を揃えて座っているのが見えた。

その顔は喜色満面、まさに結婚を喜ぶ新婦の顔で、

疲れを感じさせるはずの隈も、幸せの欠片のように見えてくる。

その顔にあるのは慈悲と聡明さ、なるほど、

「優秀そうだ」

呟きは聞こえていないのだろう。

騎士アレーアは突進というのがふさわしい勢いでその姫の下に突き進む。

その主　確かアーバルシュタト　アーシュと言ったか、

彼女は己の騎士と俺の隣にいる侍女を見て、満面の笑みを浮かべたようだ。

親友が己を祝いにきたと信じているのだろう。

「あらアレーア、聞いたのかしら？」

そう言っただけ彼女は、俺の隣を見てウィンクをした。

声には落ち着き、態度から滲み出るのは天性のカリスマが、

なるほど、確かに美しく、賢そうだ。

「姫、婚約の話、真のことですか!？」

が、その柔らかな雰囲気をはじき飛ばすほどの猛烈さで、騎士殿はまくし立てた。

「ええ、本当のことよ」

「っ、あ、相手は！」

「貴方も知っている方よ、アレーア？」

とても優しくて、賢くて、強いお方」

悔しげな、あるいは愕然とした様子が、騎士殿の背中から窺えた。

「……伯爵ですかっ」

大きくゆったりと、王族らしく鷹揚に頷く姫。

噛み付くように、躑のなっていない犬のように騎士殿が食い下がった。

「……ハフカース伯爵と姫の婚約の話。

いくら何でも急すぎではありませんか？」

「王政府も了解してくれたのよ？」

既にそこまで話が進んでいたとは。

隣、小さな声で、侍女が漏らした。

堪えるように、大きく息を吸って、姫の瞳を見る騎士殿。

後ろからだ、彼女がどんな表情をしているのかは分からない。

それでも姫が息を飲み、そして顔の喜色を一寸緩める顔つきだ。

相当に覚悟しているらしいことは、容易にうかがい知れた。

騎士殿は、真っ直ぐで、素直なのだ。

そして真に主のことを案じてもいるらしい。

「その結婚、考え直しては貰えませんか!？」

だからこそ言葉も真っ直ぐになる。

隣、額を抑える侍女。

俺は軽く笑う。

面白い。

そして場は氷る。

陰しく顔を変えたのは姫。

見るからに怒りに満ちている。

幸せに水を差されたこと、そして親友に裏切られた心地が彼女を襲っていることは想像に難くない。

「……一体どんな見なのかしらアレーア」

「姫、私には未だにあの男が信用できないのです」

言い切った正直者^{ばか}

だがそれほどに心配なのだろう。

私も、かつてはあのような忠誠を一人の小さな女に捧げていたのだ。

愉悦が蘇る。

大人しい心地が、あるいは狂乱の色に染まる。

ああ、色々と感情が思い出される。しかしどうにも精神状態がぶれる。

精神年齢と肉体年齢のずれ。

多くの経験と感情。そしてそれを無理矢理に浄化したこと。

狂熱が、そして島でのことが、あるいは平穏だったことが、

どれも昨日のように感じられる。全てが等しく迫っている。

だからこそ、俺の心は不安定にならざるをえないのだ。

「アレーア、不愉快だわ」

姫はよく通る声で、不思議とはつきりと言った。

「ですが、姫、幾つかの考えや推測が……」

「推測も証拠もないの。」

あの方のお陰で、国軍 旅団の連中とも上手くやれて。

この街の経済も上向きで、あの人の部下や従士のお陰で、行政も楽になった。

王弟派であつたことが気になるの？

それでもあの人が居たからこそ、件の事件も解決に向かっているのではない？

証拠も痕跡も、そして被害も、なにかもあの人のお陰で助かったのではないの？

貴方が一人では、何もできなかったのよ？

力が無かった私を助けてくれたあの人を、私は疑うことをしたくない。

これらの事が、私には証拠に思える、あの人の好意と高潔さの、何よりのね

おかしいことかしら？」

言い切った姫の意志は固いようだ。

俺よりも背の高いらしい姫は、背筋を伸ばし、やや下にあるアレーアの頭を睥睨する。

「し、しかし、姫様！」

騎士殿が拳を握りしめたのが見えた。

「メイザーも同意見なの？」

「……はい」

「貴方の父は同意してくれたのよ？」

「……それでも、です」

恋は盲目か、こうなつては……

人間の最も厄介な感情は恋、あるいは愛と呼ばれる本能の夢だ。

肉欲という本能的欲求と信頼という理性的行動が、運命的に出会った時に起こる、

男女を問わない盲目性を生むその結合は、人類社会に多くの混乱を生んできた。

この賢く、優しく、人間的に高くあつただろう姫も、

その範疇からは逃れられないのだ。

それが人である限り。

沈黙。複雑な感情が場に渦巻いている。

そして、その時だった。

後ろの扉が開いた音がする。

俺は思わず振り向いた。

合わせるように隣の侍女も。

そして「貴様！」という声から騎士殿も振り向いたのだろう。

「ああ、ハフカース」という声から、姫の眼差しがその彼に向けられていることが分かった。

その白い貴公子然とした男に。

5

白い外套、金系による獅子の紋様。

内側には白と赤のショーズ。

それをベルトで巻き付けているらしい。

恐らく絹製らしいマフラーに似た装飾具。

ズボンは実戦に赴く騎士が使うような堅実な灰色のブレ。

まさに貴公子、物語　　アーサー王物語、シャルルマーニュ伝説、
狂乱のオルランド。

数多の騎士が現れる諸処の物語の内から出てきたような、いけすかない男だ。

落ち着いた足取りで、両手を広げながら穏やかな笑みを浮かべている。

顔には無精髭、

あれは俺の元居た世界で、若い頃に一部の若者の間で流行った計算し尽くされた無精髭に似ている。

個人的に気に入らないのはその瞳だ。

深い？の光彩の奥にちろちろと見え隠れするのは隠しきれない野心の織火。

俺の年齢故に気づけたのか、相当巧妙に隠しているが、まあ、気づく。

警戒すべき対象。

彼は俺たちの隣を通り過ぎ、いきり立った騎士殿の隣を過ぎる。

終始、部屋に入ってから、姫の前に至るまで、

俺たちに一切の目をくれなかった。

あえてそうしているのが見え見えだ。挑発的でもある。

「ハフカースッ!!」

と吐き捨てるのは騎士殿、というか騎士殿、腐っても目上だろうに……。

しかし貴公子は雑音など耳に入っていないという態度である。

「何か話していたようだね、アーシュ」

「……え、ええ、でも別にどうってないことよ?」

恋する少女そのものの、柔らかなのぼせ上がった笑い。

それを見て辛そうに、あるいは痛みを堪えるような表情の騎士。

「っ、姫様!!」

煩わしそうな顔をした姫アーシュ。

それを遮るように、長身の男が、にこやかな顔で騎士アレーアの顔を見る。

「……ああ、こんにちは、アレーア卿」

「そんなことはどうでもいい、それより……」

「ご苦労様、任務はどうだったかな？」

怪我もなく、帰還してくれたようだなによりだよ」

報告書は後で、執務室に持ってきてくれないか？と微笑み。歯牙にもかけていない態度を取る。

「それでは……」

言って、姫へと顔を戻そうとした男に俺は声をかけることにした。

というよりも、視界に映っている騎士殿の肩の震え方が半端無いのだ。

このまま背後から切りつけそうな気配すらある。

フォローを。

「部下からのご報告は既に終わったのかね」

男は立ち止まり、こちらへと振り向く。

「君は誰かね」

露骨に、この得体の知れない餓鬼への警戒心を目に出していた。

但し、その顔は相も変わらず笑顔だ。

「何、流れの秘蹟士だ、と言いたいところですがね、

メイザーの血筋に連なる者ですよ」

とりあえず、無位でこんな口を利いたと知れたら、ただじゃ済まないだろう。

咄嗟だったが隣の侍女殿の家名を借りることとする。

ついでにこれで、俺がこちら側だとあちらに示すことが出来る。

隣、メイザーがそれを補足する。

「従弟です、父が養子に取りたいと言っています。本日は挨拶を」

如何にも己が上位に居ることを疑ってもいない、鷹揚な顔きを見せたハフカース。

しかし警戒は隠していない。まあ、明らかに嘘であるからな。俺の話は。

「……メイザー卿、事情は分かった。

ついでに言っておくがね、今度会うときまでに、

義兄君に、口の利き方を教えたほうがいいのではないかね？」

どうせ、後で怪しまれるのだ、こちらから攻めの姿勢を崩す意味もない。

と考えるのことだが、これで正解だったのだろうか？

いや、行動してから考えてもしょうがないことか、むしろ必要なのは度胸なのだろう。

「ええ、了解しました」と侍女殿

「それで君、面白いことを言っ たね」

目を細める男。

やはり、気になったのか？

俺を侮っているのか、それとも部下から俺のことについて報告を受けているのか。

「いえ、こちらの勘違いでした。 別人と勘違いしていたようです。気にしないでください。」

ただ今度、貴方の家を訪ねて見たいと思ひまして、地下に多くの宝をコレクションしていると聞いて」

如何にも窘められたから丁寧語を使い出した餓鬼を装って、

言い訳にもなっていない舐めた言い訳で相手の誰何を逸らす。

この見た目で有り難いのは、こちらの切り札を格好自体で隠し通せることだと思える。

ともあれ、当てずっぽうだが、探りを入れてみた。

そして一瞬この美丈夫の顔が鋭く歪んだのが見えた。

これだけで成果は上々。

後ろ暗い物を隠すのは地下。

騎士殿の襲撃について知っている素振りを見せて、

後ろ暗いところを突く、いやまあそうやって言えばカッコイイが、

やってることは、猿でも出来るような簡単な挑発だ。

そんなものにも反応するとは、この男、相当に後ろ暗いと見える。

まあ、これで……今、出来ることは最低限行えただろうか。

幸い、傍から聞いて今の会話は普通の会話に聞こえた筈だ、表面上は。うん多分。

……いや、露骨に怪しい気もするが、気にしないでおう。

俺は頭を伏せて、膝を地に付けて、姫とその結婚相手に挨拶をする動作を取る。

文化が違う可能性もあるが、これだけやればとりあえず礼儀は伝わるだろう。

隣でそれに会わせるように侍女メイザーも似たような動作。

ふむ、とりあえずこの西洋式の身振りで大丈夫だったようだ。

騎士殿も、このまま食い下がっても姫の心証が悪くなるだけだと悟ったか。

苦い顔をしながら姫へと頭を垂れた。

……

……

数秒の後、隣のメイザーが顔を上げたので俺も同じように上げる。

まあこういうのは見よう見まねでどうにかなるのだ。

見ると、先ほど一瞬だけ崩れに崩れた仮面を見事に被り直した男と、最も祝って欲しいと考えている者に祝ってもらえなかったことへの複雑な感情を隠していない姫がそこにいた。

「では、諸君、我が愛しの姫君の友人諸君。

婚姻の儀は一週間後。

是非来てくれるかい？

場所はカッセン中央託宣所を予定しているよ」

笑う男の目は笑っておらず。

そして少し先で床に膝を立てている騎士殿の、喰い殺さんばかりの
形相が印象深かった。

到着 登城（後書き）

主人公蟹病

主人公が蟹化していく。

まあどうにか違いを出そうとしているので、似ていないところも多いのです（と思いたい）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0561ba/>

ひとかみほん 異世界移転系魔導譚

2012年1月5日18時33分発行